

日大闘争：大場久昭・森 雄一・池上宣文・ 清宮 誠 各氏 聞き取り

Nihon University Struggle: Interviews with Hisaaki Oba, Yuichi Mori,
Norifumi Ikegami and Makoto Seimiya
Collaborative Research Committee

共同研究委員会

本資料紹介は、国立歴史民俗博物館共同研究「「1968年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究」（2015～2017年度）と展示プロジェクト「「1968年」―無数の問いの噴出の時代―」（2015～2017年度）が合同で行った「1968年」社会運動関係者への聞き取りの速記録である。聞き取りは、共同研究の初年度である2015年の11月15日に、国立歴史民俗博物館第1会議室で実施された。時間は、ほぼ4時間に及んだ。

ゲストスピーカーの大場久昭氏（1966年入学、文理学部）は、2008年に出版された『新版 叛逆のバリケード』（三一書房）の編集委員の一人、森雄一氏（1965年入学、経済学部）は日大闘争の前史をなす経済学部での民主化闘争時代から深く運動に関わり、日大全共闘成立後は、情報部門を指導した人物、池上宣文氏（1968年入学、経済学部）は、体育系として、初期の全共闘運動に対立的な立場から全共闘闘士に転じた経歴であり、1969年初頭のバリケード解体・授業再開後の日大闘争を知る人物でもある。清宮誠氏（1961年入学）は日大数学科事件（1962年に起こった文理学部数学科教員4人に対する、日大の思想との背反を理由にした解雇事件）の際、学生として抗議運動を組織した当事者であり、日大闘争にあたっては、OBとしての支援の組織化、さらに救援会活動の中軸として学生の運動を支えた。

当日の研究会・展示プロジェクト側の出席者は、以下の通りである（所属は聞き取り当時のもの）。

安田常雄（神奈川大学）、道場親信（和光大学）、大串潤児（信州大学）、平野泉（立教大学）、清水靖久（九州大学）、根津朝彦（立命館大学）、黒川伊織（神戸大学）、友澤悠季（立教大学）、谷合佳代子（大阪産業労働資料館）、矢作正（「技術と労働」資料館）、鈴木玲（法政大学大原社会問題研究所）、荒川章二（国立歴史民俗博物館）、中野良（国立歴史民俗博物館）

以下の筆耕は、当時の国立歴史民俗博物館機関研究員 中野良が行い、話者側の確認を行った上で、荒川が全体を調整した。〔 〕内補注は、荒川と中野によるものである。

（文責・荒川章二）

荒川：「1968年」第2回合同会議の2日目を開始します。本日の予定ですが、日大闘争の関係者4名の方をゲストスピーカーとしてお招きしました。最初に紹介させていただきます。大場久昭さん、日大文理学部出身で、『叛逆のバリケード』は文理学部中心ということなので、同書に沿った話と、全体を見ていらっしゃるのでその辺の話があると思います。経済学部の方から森雄一さん。経済はひとつの運動拠点ということと、秋田明大さんと同級生ということで近しい関係にあるということです。池上宣文さんですが、第1回会議で資料を見ていただいた時に、「情報部」という部門があるということをお示ししたと思いますが、池上さんは情報部のメンバーです。先ほど話を聞いたのですが、日大は十数個の大学が個別にあるような性格だと把握した方がいいという話でした。各学部を繋いでいくのがかなりの作業だったということなので、そういう話。あるいは、諸方面から直接情報をとるといような、主に情報関係のことをお話いただきます。前回ご挨拶をいただきましたが、現在佐倉市議で日大闘争の救援にも関わられた清宮誠さんにもお越しいただき、適宜お話に加わっていただく形にします。

まずは大場さんから話をさせていただきますが、大場さんの方で仕切っていただいて、適宜お三方に話を振っていただきながら全体を進めます。ずっと話を聞いているのも苦痛かもしれないので、適宜質問もありにして進めたいと思います。12時頃まで皆さんにお話ししてもらったうえで、個別の質問をしていただきます。

（日大闘争に関連のない発言を省略）

それでは、日大闘争の話に入りたいと思います。

（委員自己紹介、省略）

大場：改めて簡単な自己紹介をさせていただきます。解散していないので、日大全共闘の大場と申します。もっと厳密に言いますと、通称「文闘委」、文理学部闘争委員会に所属しております。1966年入学で、闘争の時には3年でありました。同じ学科の先輩が田村正敏〔日大全共闘書記長〕だったものですから、本来は彼が生きていればこの席に出てくるはずですけど、私をかわいがってくれた2人の先輩が亡くなってしまいましたので、清宮さんに言われて引っ張り出されました。何をお話しすればいいのかと思ったのですが…実は膨大な資料があるということは十数年前からわかっていたんですけど、結局手が着かなかったんですよね。すでにその時には山本義隆さん〔東大全共闘議長〕が資料をご自分で整理なさっていたので、そのノウハウを伺いつつ、〔整理を〕やろうとは試みたのですが、結局できなかった。なぜかという、その時には11学部全部やろうと思ったんです。実際に〔整理を〕経験した義隆さんは「そんなのは多分無理だろう」と思っていたらしいですよ。『ひとつの学部でもいいからまとめなさい』とは言われていたのですが、その時はやれるだろうということで、結局はやらすじまいで来てしまったんです。

もうひとつは、かなり前から、闘争に関わった人たちの間で、あの闘争のデモとストライキが日大開闢^{かいびやく}以来だと触れ回っているんですよね。これは明らかに間違いなんです。荒川先生に渡したかどうか分かりませんが、闘争中の1968年10月に出した『叛逆のバリケード』、夏頃に編集をやりました。新版〔三一書房、2008年〕の方では私が手がけた第2部を

全部抜いたんです。要するに、〔新版は〕68年・69年の闘争以降しか問題にしなかったんです。実は、自費出版で出した版では過去の闘争のことについて触れてあるんです。私が入った時には、古田〔重二良〕会頭は日大のことを「学生運動がない大学である」「教職員組合がない大学」ともうひとつ自慢していたような気がします、それがことごとく68年に打ち砕かれた。全学連とまったく関係ないと言うんですけど、私はこの中で書いているんですよ。確かに、闘争が始まった時にそういうことを知らないでみんな入ってきているから。この本が出たのは10月で、大衆団交が終わって、要するに局面が厳しい時です。だから、仲間はみんなこれを買ったんです。でも読んでいないんです、はっきり言って。日大生の最大の欠陥は、持つことが重要であって読んでないんです。だから未だにそういう都市伝説が触れ回っているんです。それをなんとかしなきゃいけないというので、10年くらい前からシコシコ調べ始めまして。第2部「圧殺と抵抗の記録」のなかに書いてあるんですよ、1957年に日大経済二部の学生自治会が正式に当時の全学連に加盟したと。翌58年には古田会頭の〔日大〕改善方策案に反対してストライキを打っているんです。2日間打ったんですけど3日目につぶれている。そのことは、68年の6月12日だったかに（森：11日。）、亡き田村正敏が私に向かって言ったんです。「3日間ストライキを続けろ。そうすれば日大の史上に新記録を作れる。」彼は知ってたんです。でも、ほかの圧倒的な人たちはみんな学生運動どころか自治会の活動にも無関心だったから、そうしたことを一切抜きにして、5月・6月の闘争で全部入ってきている。そのため、そういう都市伝説が生まれてしまった。実際のところは1950年代から連綿として闘争がありまして、今回この席でもう一回強調したいのは、私たちは68・69日大全共闘といっている。なぜそういうかという、ここにも書いてあるんですけど、60年安保の時に「安保阻止日大全共闘」という組織があったんです。ただし、これはどういう組織かよくわからないんですが、多分各学部の60年安保に反対する人たちの連絡体だったような雰囲気。だから我々の組織とはちょっと違う。実際に荒川先生を通じて歴博に入れた資料のなかに、60年安保の時に理工学部の学生が大怪我をしまして、多分、樺美智子さんが亡くなった日だと思うんですけど、それを当時中央公論社から出ていた『週刊公論』の記者だった、今もう亡くなったんですが岩川隆さんという、梶山季之さんのグループの人が取材に来まして、その学生に取材を試みたということを理工学部の職員が伺い書を立てている、その資料が多分入っているはず。これは僕がチェックする時に見えています。実は闘争の後、僕は30年くらい週刊誌の世界にいたので、岩川さんとも生前ちょっと面識があったんで、「こんなところで岩川さんが登場してるんだ」というふうに思って、それは明確に記憶している。かなり大学側に知られないように学生運動はずっと持続的にあったと。で、一番我々に直結するのは、それこそ清宮さんがいらっしゃる日大文理の数学科事件なんですよ。ですから、これは手前味噌かもしれませんが、僕らが入学した1966年から、日大の古田体制の厳しい規制が徐々に崩れ始めてきている。その最初は66年の秋から冬ですけど、応援団闘争というのをやるんです。結局、応援団を解散に追い込むんですけど、ただし闘争があったのは文理学部と経済学部だけなんです。これも実は日大らしい話ですが、我々が仕掛けたんじゃないんです。要するに、必

援団の下級生(1,2年生)が上級生(3,4年生)に痛めつけられて、耐えきれなくて集団脱走するんです。集団脱走したけど自分たちの身の保障をどうやってするか、報復されないためにどうするかというと、新聞社に駆け込んじゃって記事にしてもらおうんです。公開されると大学側も応援団も手が出せない。そうやって、だから実際は応援団内部の問題が吹き出して、それをきっかけに闘争をやるんです。そういうことがありまして、それが多分68年の大爆発の最初の予兆だと思います。

ここで、日大の11学部の構成について簡単に述べさせていただきますと、我々の闘争が始まった時、学部が11、校舎は13ありました。一番北が福島県郡山に工学部、千葉県に生産工学部と理工学部の習志野校舎、都心の山手線の内側に理工学部、経済学部、法学部、歯学部がありました。山手線の外側に北から芸術学部と医学部、世田谷に文理学部の世田谷校舎、商学部、農獣医学部があります。静岡県之三島に文理学部の三島校舎、これで11学部13校舎。11学部のなかで、本来だったら全部単独でバラバラなんですけども、唯一文理学部というのは、ここも日大的な変則的制度なんですけど、法・経・商・理工の4学部が1年間の教養課程を世田谷か三島で受ける。実は森さんは三島なんです。僕は文理学部ですから最初から世田谷にいます。今回いろんなことを話してわかったのは、実際にはそういうところから来ている人たちじゃなくて、どういう目的かわかりませんが、隣にいる池上君は1年の時から三崎町の本校にいますよ。

池上：俗に言う一般教養は文理学部で受けなきゃいけないのを、だいたい200人だけ経済学部経済学科の学生として初年度から入学させられていた。私たちは最初それが当たり前だと思っていた。後で話をしてみると、どうも僕たちの方が当たり前ではなかった。これは多分70年・80年のゆく先を見据えて、学部の独立採算制をきちっとするために、テストケースで身元のはっきりしたというとおかしいですが、親が公務員とか銀行員でもかなり〔上級職〕とかじゃないか。聞くと普通のサラリーマンや農家、商業をやっている方よりも、官僚の子どもとかが多かったように思います。

大場：多分、我々が想像するには、大学の与党勢力を作ろうとしていたのではないかという感じがします。実際は文理学部というのはそういうところで、最初に入ってきますから、そこでサークルを通じて知り合ったり、学部を越えたそういうネットワークが最終的に全共闘の基盤にひとつあるんだと思います。正直言って同じ文理学部でも三島と世田谷の間に交流がほとんどないんです。森さんは三島ですね。多分、女子が多かったような…。

森：女子が多くて、雰囲気がすごく柔らかかったですね。

大場：家政学科の短大みたいなのが三島にあるんですよ。そんなことは世田谷の方は全然知らないんですよ。だから、非常に巧みに分断工作されていた。これもまだ調べきいてないんですけど、農獣医にも短期大学部というのがあって、それがどうも藤沢にあるらしいんですけども。

池上：藤沢には経済もあった。経済学部のなかに短大があるんです。

大場：未だにどういう構造になっていたのか私たちもわかっていないんです。もちろん大学の構造を追求するわけではありませんから、僕らも適当なところで打ち切ったんですけど、闘争

の後で肩寄せ合って話すといろんな矛盾が出てくる。多分永久に謎だろうと思っているんですけども、そういう段階ですから、簡単に言うと11学部13校舎で13通りの見方がある。山本義隆さんのような東大の方に聞くと本郷と駒場も多分違っていたと言うんですけども、〔日大は〕それ以上に違う。一種の気風とか気質とか、闘争のやり方も全部違うんです。闘争委員会の立ち上げも全部違うんです。

森：急拡大してましたからね。

大場：もう急拡大です。基本的にあの当時言ってたのは、ポツダム自治会の名残なんかないというふうには言っていたんですけど、実際は確かに執行部にはいなかったけれど、森さんみたいに言わばフラクションのボスだったりした人たちがいる。要するに関係はあるんです。関係がないと闘争なんかやりませんよね。関係はあるんだけれども、それと縁を切って闘争委員会を立ち上げている。実はこれも最近わかったんですけど、理工学部の習志野校舎は時限ストなんです。7月になって5日間。それは旧ポツダム自治会の委員長がやっているんです。ところが5日目にバリケードを解こうとして、それに不満な連中が結局その委員長たちを全部追い出して新たに闘争委員会を作っている。芸術学部も自治会再建運動みたいなのが何度かあって、68年の闘争が始まる直前に自治会再建運動をしていた部員がボクシング部、実際には〔芸術学部には〕ボクシング部なんてなかったんだんですけど、学生課の暴力機関というのが実態でした。その人たちにボコボコに殴られてるんです。それでまた自治会運動がポシャった。まったく学部的な自治会とは関係なく、映画学科の学生会に多少関係のあった眞武〔善行〕君が、要するにこの指とまれで、まったくそういうベースがないところから、本当にフリーの状態から闘争委員会を立ち上げているんです。

森：自治会だけでずっとやってきたのは経済だけだね。

大場：佐久間〔順三〕さんの理工学部や農獣医もそうなんです。要するにポツダム自治会を闘争委員会に組織替えして、全部。

池上：法学部も少し…。

大場：法学部は全然ない。だから、ひとつは学生内部で闘わざるを得なかった。簡単に言うと、暴力的な右翼だけじゃなくて、僕は中間派と呼んでいるんですが、いわば括弧付きの「民主派」ですね、実は闘争前にはそういう人たちを巻き込んで民主化の流れは組んでいたんですけど、そういう人たちとも分かれなければいけなかった。そういう意味では、けっこうしんどいといえましょうけど。

森：全学部をまとめるのは大変なんです。

大場：それから、思想的に統一されていないんです。右から左までいるんです。僕は未だに会ったことがないんですけど、理工学部闘争委員会には、今なお「天皇陛下万歳」と言いながら共にゲバルトをやった仲間がいるんです。どうも都下の旧家の出らしいんですけど、今も学友が訪ねていくと「天皇陛下万歳」が変わっていない、頑として。これは僕も文字でしか読んでいないんですけど、習志野だったか津田沼の、要するに全共闘右派ですよ。

池上：それは左派です、極左が全共闘（笑）。

大場：全共闘右派の人たちは、自らを「人民右翼」と呼んでいた。これは僕も聞いたことがない

んですけど、丸山眞男先生の弟の丸山邦男さんが文理学部に来てルポを書いている。延々と北一輝が好きだという学生のことを書いているんですよね。全然思想的に合わないんですけど、そういう連中が日大全共闘にはいたと。左派で党派の影響下にあって党派に流れていく人たちに全然引けを取らずにやっていたと。本当は反りが合わないんですよ。これだけ時間が経ってますから「お前本当のことを言え」と〔言う〕、「あいつら嫌いだ」と。でも、一緒に闘争をやるしかない。前面の敵が強すぎるから、些細な点にこだわっている余裕がなかったんですね。もっと有り体に言うと、彼らの方が街頭行動においてはきわめて勇敢でした。

森：何を言ってるんだ、そんなことはないだろう(笑)。

池上：みんな勇敢だったんですけどね。今聞いていて私も胸が痛いんですが、私もどちらかというと今でも憂国の士が好きで、全共闘の諸君を「憂国の士」と呼んでいます。そのくらい日大全共闘というのは体育会系。私も元々体育会系に近かったんで、不思議な闘争だと思います。だから、今までの歴史の自治会全学連とはまったく違った闘争ですね。つい隣で麻雀やってたやつもいるし、空手部のやつもいるっていうように、ちょっと考えられない部隊が多かったと思います。

大場：体育会という誤解を生むので、体質的には運動部体質なんですよ。未だにそこはかとなく長幼の序を大切にしまして、学年がひとつ変わると一応敬語になるんですよね。僕は平気で芸闘委の委員長を眞武「君」と呼ぶんですが、彼は僕のことを君とは呼ばず「さん」付けて呼んでくれます。彼が2年で僕が3年だから、一応長幼の序を重んじてくれているんです。僕は誰でも「君」で呼んじゃいますけど、そういう体質があります。

もうひとつ、つい最近山本義隆さんの『私の1960年代』〔金曜日、2015年〕を読みまして、去年僕らの集まりに片桐〔一成〕さんという東大全共闘で安田講堂に立てこもった方が来て、その人の話がちょうど〔山本さんと〕ダブって、思いついたんですが、片桐さんによると5月・6月の僕らの闘争を、もちろん東大闘争は始まってないんですけど、見に来たって言うんです。野次馬で。本郷からトコトコ歩いて。それを考えると、僕らの文理学部が3番手でストライキに突入したのが68年の6月15日なんです。その時、翌日の朝刊で〔見たら〕、東大に多分、青医連の今井〔澄〕さんたちが突っ込んでるんですよね。6月11日の僕らの闘争を見て、それまで医学部だけにとどまっていたものを「日大のやつらがやったぞ」というので、ひょっとしたら第一次安田講堂占拠というのはそれに触発されたんじゃないかな、という感じがしてなりません。どなたかにここを解明していただくと、多分新しい見方が出てくると思います。ですから、実は闘争中はそんなに東大の方と交流はなかったんですけど、向こうの東大の方たちが非常に興味を持っていた。ところで、この東大との比較でいうと、眞武君が当時の新聞や雑誌を全部読み返していて一番適任なんですけど、彼が曰く、1面は東大なんだそうです。日大は3面記事なんだそうです。当たってるなという感じはします。だから、多分あの時東大が立ち上がっていなければ、日大闘争は多分注目されただろうけど、今のように喧伝されることはなかったんじゃないかと思います。

森：ちょっと異議あるな(笑)。当時もちろん新聞が何も公明正大だったと言えるかどうか

りませんが、朝日新聞・毎日新聞とか、何がすばらしかったかという『朝日ジャーナル』が非常に積極的に取り上げてくれたんですね。私は経済なので、全共闘以前の段階から多少そういう取り上げようかという何かを感じていて、よく新聞や雑誌を見ていたので、かなり取り上げてくれたというのがあります。何十冊にもわたって当時の『朝日ジャーナル』に掲載されていますので、あれはやはりすごいなと。それを受けて朝日新聞などアカデミック系の新聞がかなり報道してくれたというのは、それが1面だったかどうかという問題は残るにしても、かなり取り上げてくれたという意味では、すごく感謝しているのですけどね。

清宮：『朝日ジャーナル』を持って闘争に参加したとかっていう話があった。

森：だから、『朝日ジャーナル』を見て、みな心ある人たちは「やろう！」みたいな意志が掘り起こされたんだと思います。同時に、社会の人たちがすごく温かく我々を支援してくれ、温かく見てくれましたから、トータルとしてそういう時代だったのかもしれませんが、それは感じてます。

荒川：『朝日ジャーナル』を見て、日大生自身も喚起されて闘争に参加するという人がけっこういたのですか？

森：まさに闘いがあった次の週にドーンと特集的に掲載してくれるんです。それは高木〔正幸〕さんとか特定の記者さんたちがかなり熱意をもって報道してくれるので、ずっと最後まで、72・3年くらいまでかなりの報道をしてくれていますので、闘っている我々も次の週それを見る、当然学友たちもそれを見る、そういう意識はありましたね。あと、『アサヒグラフ』ですね。写真がね、芸術の連中がかっこいいものだから、かっこよく写っているもんですね。

大場：僕も写っているんです。写っているのでバックナンバーをずっととっておいたんですけど、歴博に入っていると思います。ただ、僕を識別するのは難しいと思います。そのなかにさっき言った丸山邦男さんが一文を寄せていて、多分日付の月号は8月段階だったように思いますけど、実際に原稿を書いたのは7月末だろうと思います。そのなかで「こいつらはとにかく何かこれまでの学生運動と違うことをやるんじゃないか」ということを書いているんですよ。多分あの時代の非常に鋭敏なジャーナリストとか編集者というのは、これまでの学生運動を担ってきた連中とは一味違うと、その辺のことは嗅ぎ取っていたように思います。

森：記事の内容が単純に、たとえば秋田明大なら秋田明大君の人間性とかそういったものをかなり特集して書いてくれたり、獄中記を特集してくれたり、「日大は一体どこに行くんだ」と69年後半くらいにすごく分析的に書いてくれたり、という意味では、かなりジャーナリスト的なあれはものすごくあったと思います。『朝日ジャーナル』だけではないけれど。

清宮：一般学生の闘争への意思表示というのは、もちろんデモに参加するというのはあるんですけど、それとは別に『朝日ジャーナル』を持って神田を歩くというね、それが学生の日大闘争に対する意思表示なんですよ。大勢の学生が集まって、彼らは実際の全共闘のメンバーですから闘う部隊ですけど、それを支持する人たちが『朝日ジャーナル』を持って歩く、ということがありましたんで。

森：清宮先生も、確か特集で『朝日ジャーナル』に出ておられますので、そのぐらいいろんな形で。

大場：今ちょっと思いついたんですけど、僕らの世代で日大にいた人間にとって、全共闘というのはちょっとかっこいいみたいなんですよ。本当に全共闘だったかどうかかわからないんですけど、産経新聞で多分5月・6月の初期の段階、ジグザグデモの隊列の向かって右端に、何とテリー伊藤が写っているんですよ。写っていることは彼も知っていて、「実はこの後、投石が間違っって自分に当たって斜視になった」なんてことを言っているんです。どうも、日大全共闘であるということが恥ではなく誇りになっている。非常に面白い世界だったという感じがします。

森：余分な補足をする、私はまだ現役で仕事をしていて、新橋や神田でよく呑むんですが、ずっと通っている行きつけの店なんかに行きますと、別に自分は今更そんなこと言いたくも触れたくもないと言うんですが、どこからか当時の同じ年代の人たちが集まってきて、どうしても話をしたがるというか聞きたがるというか、なんとなく尊敬されているみたいなんです。呑みながらそれはないだろうと思うんですが、それは中央の方とか明治の方とか、さすがに早稲田の方はあまりいないんですけど、今でもそれは続いてまして、哲学やられた方とか。哲学なんか「ハイデッガーさっぱりわからないから教えてくれ」なんて言うんだけど、そちらははぐらかされちゃって、日大全共闘の話を聞きたがるというか。おじさんたちはすごくそういう思いがあるみたいですね。

大場：話は変わりますが、荒川先生から〔の要望で〕、日大闘争の始まりである200メーターデモについて。これは経済で始まっているので森さんに来ていただいたんですけど、その前に僕らが同人誌的なものでこういうのを出しているんですけど、その中で僕が一度書いたことがあるんです。書いたけどほとんど当時の仲間にしき配っていないんですけど、何か言ってくれるだろう、いちゃもんつけてくるんじゃないかと思ったけど、誰も言ってこないんです。『忘れざる日々』〔「日大闘争の記録」制作実行委員会編〕の3号です。現在は6号までできました。このなかに僕書いたんですけど、読み上げます。多分これは資料には残ってません。最初に行ったのは文理学部で文理社研のOBだった日比野〔光男〕さん。この証言が僕のでっち上げではないというので、一応同席者も全部入れて文字にしました。で、時期がわからないんです。68年の何月何日か、記憶が定かではないんです。

池上：5月22日の地下であった時じゃないか、それか5月11日か。

大場：少なくとも5月23日の200メーターデモの…この前、全共闘副議長の矢崎〔薫〕さんに詰問して、断定はできないけれど1週間くらい前だろうというんです。これは僕が勝手に名付けたんですけど、「市ヶ谷四者会談」というのをやってるんです。市ヶ谷の外堀通りに日比野さんが屋根裏部屋を借りてまして、そこに日比野さんと田村正敏（のちの日大全共闘書記長）と副議長だった矢崎さんがルームメイトだった。共同生活をしていた。そこにある日、秋田さんが訪ねて来て「闘争を始める」ということを打ち明ける。要するに「協力してくれ」と。実は日比野さんは4・20事件などでこれまで弾圧された経験があるから「やめろ」というんです。だけど秋田さんは「やめない」「やるしかないんだ」と。で、簡単に言えば矢崎さんと田村君を引き込んだんですね。これがいつあったのか、未だに矢崎さんの

記憶も定かではない。この前やっと「1 週間くらい前だったんじゃないか」と言っていました。多分これが最初の闘争への「事前謀議」だろうと思います。ですから、未だに文字にはなっていないですけど、全共闘を発足させた時の執行部 6 人のメンバーというのがいるんです。で、それは学部別で言うと経済 2 名、法学部 2 名、文理 2 名なんです。後で法学部から酒井杏郎君と大川〔正行〕さんが入ってくるんですけど、それまでの全共闘を立ち上げたのが全部法学部、経済学部、文理学部。要するに共闘の密約が最初からあったんです。これがひとつ。それからもうひとつは、これは原文がないんですけど、日大新聞の当時の学生記者の諸君が、69 年の何月だったかに本を出すんです。『日大紛争の真相』〔日本大学新聞研究会編、八千代出版、1969 年 6 月〕という本、これは多分歴博に行っていないと思いますが、そのなかで気になる一項が書いてあったんですよね。5 月 23 日、要するに地下ホールで 200 メーターデモの時に、この日に「日本大学全学共闘会議」の名前でビラが出たというんです。

森：それはないね。

大場：これがね、そう書いてあるんです。僕はここに全文を引き写してあるんですが、考えたのは、ひょっとしたら「市ヶ谷四者会談」の後に、ある程度のそういう認識があるんだけど、そこが日大らしく杜撰で、要するにフライングスタートをしちゃったのかなと思ってんですけど。

森：なにせ 50 年前なんでよく覚えていないんですけど、5 月 23 日は経済で…4 月 15 日に 20 億円使途不明金というのが新聞紙上に出ちゃったんですけど、実はその前に経済学部は 1966 年の古賀〔義弘〕執行部から藤原〔嶺雄〕執行部、ようやく秋田執行部になるんですけど、ずっとやってきているわけですね。ようやく学生を集められるようにというか、集会、いわゆる違法集会なわけですから、とにかく集まれというふうにできたのは、実は秋田執行部を作って〔から〕。私は執行部に入っていない、というのは別働隊で秋田君を支えるということをやったんですけど。その辺でようやく 68 年の 4 月、ちょうど新入生歓迎会を認めないとか、看板撤去されるとか、執行部に予算を出さないとか、そんな問題があって執行部が大変だったんですけど、こっちで別働隊が一般学生にチラシをばらまくわ、アジるわ、落書きするわで、そんな行動をしながら。結果的には教室を使わせないとまで言われて、地下集会になったわけですけど、それで何回かやって、4 月〔5 月〕23 日の地下集会に応援団の殴り込みを受けて、私の記憶がよくわからないんですけど、その時に応援団を払いのけて、初めてデモを組織して、地下から校舎を出たところまでしたデモじゃないかと私は思うんだけど、指揮をした記憶がうっすらあるのでそう思うんだけど、それを今皆さんは「いや、学校から近くの錦華公園までデモしたのが 200 メーターデモだ」とか「錦華公園からデモったのが 200 メーターデモだ」とかいろいろな意見があるんですけど、200 メーターデモはみんなを集めて校舎の中でデモって、〔校舎から〕出たという意味でただか 200 メーターのデモであったろうなと。その時に、もうひとつわからないのが、全共闘の結成が実は私が思ったよりかなり早いタイミングでやっているんで、私も全共闘の結成には背景的にずっと関わってきているもんですから、記憶がないんですけど、秋田君とか矢崎君とか、要するに 5・23 からあつという間に全共闘が結果的にはできているんだよな？ だから、そこでどういう密談

をしたんだかというのは、秋田執行部を作った時は覚えているんだけど、全共闘を作った時の動きはちょっと記憶にないので。ただ、おそらく1週間かそこらでできあがったんじゃないかと思うんだな。

池上：それは執行部の話なんです。私は執行部でもないし、一般の、普通ではない右翼系の学生だったんで。5月23日の地下に彼らが、「彼ら」と呼びます、集会を開いたわけです。で、学校側の方で先輩たちが「ちょっと来い」と、「赤が騒ぐから押さえに来いよ」と、「お前も来いよ」と。「赤狩り」という言い方をしているのか、「赤が騒ぐ」と。多分それが全共闘の諸君だったんだと思います。その頃はまだ一般の学生というか普通の学生も、通常言う「右翼」なんですけど、体育会系ですね、空手部や運動部の連中が主体となって、日大の全共闘を押さえつけていくわけなんですけど、多分その時が僕は、初めて学校側から出て行ったデモが、要するに道路の方でデモをしていくのは初めて見ました。それを200メートルデモだと呼んでいるんで、それが駅に行ったとかいろんな諸説がまだあって、こちらでも調べてます。これが最初のデモで、その時に執行部が作ったか何かよりも、僕たちは表から見たのと、学校側に言われて弾圧する側と、それから一般の学生がずっとみんな見ていたんですよ。見てるところを大学側の方が「赤やめろ」とかなんとか言って、ここで初めて暴行事件を一般学生の目の前で、日常茶飯事なんですけど、特にその時に暴行事件を起こしてるんですよ。それを見ていた一般学生たちがあまりのひどさに、学ランを着ている先輩、私たちを止めるんですよ。その時に多分デモができあがったのかなと。そのデモも、この先生方全部わかるかな、日大の経済学部ってキャンパスが何もないんですよ。ほんとにビルがあって隣のビルがあって、何メートルかの道路の間ぐらいしかなくて、表に出ればもう白山通りです。そこで集会をできない、外に出て行って法学部かどこかにジグザグデモをしたりいろんなデモをしたり、自然発生的にしたと言われてます。自然発生的にしたと言われていているけど、20人か30人は執行部の人かなと。ただ、こちら〔森、大場〕がわかっている方とこちら〔池上〕が見た方と。それが日大闘争の始まりだと。その前私は何年間か大学側の人間でした。大学側の人間というか、どちらかというと右翼系ですから、その頃「赤」は悪いと思っていた。「騒ぐやつは悪いやつだ」「わが学校を汚すやつは碌なもんではない」という、もっと単純な、日大生特有の右派というんですか。全共闘の諸君もいろいろとやったのを、大学側は彼らを「赤」と呼んでました。一般学生はそれはわからないから、ただ目の前でそういう事件が起きる。私も自分ながら驚くのは、先輩が赤いジーパンをはいてるやつを「赤」と言って蹴ったりするんですよ。お笑いになるんですけど、まあ今では考えられない。面白い大学ですよ。そこから、私たちは横で見ている、新入生たちは見ている、体育会系の学生も見えていた。で、これはちょっとひどいんじゃないかというんで、6月11日の闘争に入っていく過程ですか。

森：まあいろいろ経過はあるんですけど、それはまた後でまとめてやりましょうか。

池上：これが私が見た日大闘争の始まりです。

荒川：大学側は、極秘に地下で動いている全共闘側の決起の動きを、どうやって情報収集してつかんでいたと思われますか。

森：我々はどちらかというと学級委員とクラブ・部の部員が中心で、ある程度中核的に集まっていたんですけど、当然学校側はそこから籠絡するんです。単純に言えばスパイ的。というのが、私の部の副部長も実はそういうことで学校側に寝返っているんですけど、ということなんでそういう意味では、かなり中にスパイ的なものが入っているんですね。もうひとつは、ただそうはいっても私には不思議なんだけど、経済の話になっちゃうんですけど、その当時ずっと66年、67年、68年とやってきてるんですけど、68年に秋田執行部を作って、5月23日の前後というのは、表向きの執行部と我々が裏で実は…というのは、必ず秋田執行部が狙われるわけですから。その前の執行部の時はものすごくひどい目にあっているわけですね。その前の古賀さんの時には暴力的にはたいしたことなかったんですけど、藤原執行部は400人ほどの体育会系の連中から…私も羽仁〔五郎〕先生にお願いに行って、羽仁先生は無事に逃げたからいいんですけど、〔藤原執行部は〕集団暴力を受けてシツチャカメツチャカ、半死半生になって、しかも学校側の処分を受けて解体しちゃってる、破壊されたということがありまして、そこから始まっているんですけど、秋田執行部も絶対狙われる、つぶされる、彼らの集中攻撃を受けて絶対つぶされるだろうと。つぶされたらどうするかということだったので、私は執行部に入らずに裏方をして秋田をずっと支えと、二段構えで始めたんですけど。それで68年の4月から5月というのは、私もよくわからないんですけど、執行部とどういう関係でそういう行動をして、5・23、その前ずっと集会をやっているわけですけどね、その結果の5月23日のデモになるんだけど、今でもわからないんですよ。執行部とどういう連携…。

もうひとつは、経済は水色のヘルメットというのがあるんですけど、明日決起するぞという前の日にヘルメットを早稲田の社青同が貸してくれるというので、なんと借りたんですよ。別にやり取りはなかったんですけど、たまたま私は総合経済研究会という部だったんですけど、隣の社研によく来ている、法学部とはいいながら実際は早稲田なんだと思いますけど、その彼が前の日に話をつけてくれて、数はいくつだったかわからないけど貸してくれたんですね。それを借りてきた。地下に持って行って、見ると機動隊と同じ濃紺なわけですよ。機動隊の色なんで「これはまずいよね」と、かといって白とか赤とかになるとセクトになっちゃうし、どうしようかということで、同系の水色に薄めようというんで、夜中じゅうスプレーかけてですね、それで経済は水色ヘルメットということになったんですけど。これもいろんなこと言ってる人がいますが、実際私がやったので間違いないと思うんですけどね。そのヘルメットをいつ用意したんだろうかということがわからないんですね。5月は何回も何回も〔集会を〕やってて何回も襲われているし、学生が集まってきたので、多分右翼の連中も執行部をつぶすチャンスをもてなかった。

池上：荒川先生の質問ですけど、執行部の方は前もってビラを出すんですよ。「何月何日経済学部地下で何とか討論をやろう」とか、「古田20億円使途不明金の団交をしよう」とか、その分は前もって出してくれるから、別にスパイというか、その頃はまだはっきり左翼の人たちと普通にゼミに入っている連中とは混在しているから、こういうことありますよという話も出るし、執行部がビラを出すっていう、机の中に入れてあるんですよ。落書きして

あったり、トイレに行くと「何月何日に集まれ」とか。最初は堂々とは配らなかったですね。その頃は僕も学校でもらったことないです。

森：集会も違法だし、ビラ配布も違法だし。

池上：ビラ1枚出すのでも許可がいるんですよ。

大場：僕は入学して文理学部だけの『文理時報』という学生新聞にいたんですけど、入った時から闘争が始まるまで3代とも局長が民青なんです。最初からもう、僕は違いますが、何人か民青だった仲間がいて。その時にひどかったのは、新聞を出す時に棒ゲラを学生課に持っていくんです。棒ゲラってわかりますよね？ 私が入った時の局長が「勝利だ！」何で勝利かという、棒ゲラを組ゲラに変えた、これは大勝利だと言ったんです。何で組みゲラの方がいいかというと、既に輪転機を回してるわけですから、もう学生課にせっつくわけですね。確かに学生課の課長が言うように誤字脱字が多いんです。ビラを見ればわかるように。誤字脱字の訂正であって検閲ではないと言うんですが、実際は検閲なんです。何でこういうテーマで書くんだとか。棒ゲラから組ゲラが大勝利だったというような学園というのは、多分日大しかなかったんだろうと思いますけどね。

森：面白いのはね、67年の藤原執行部の『建学の基』という新入生に配ろうとしたやつなんですけど、「×××、×××」という。(大場：伏せ字だらけ。)すごいんですこれ。記念品みたいなもので。これでシツチャカメツチャカ、400人の襲撃で本当にひどい目にあったわけ。それが1967年4月20日ですね。

大場：だいたい、空き教室をサークルとか「学生会」といった自治会の機関が使おうとすると2週間前に申請して許可を取るんです。だいたい、2週間前に許可取らなきゃ使わせないって馬鹿な話がありますか？ そんな大学ですから、日常的に学生自治なんか関係ない人間たちもみんな頭にきてるわけですね。学園祭があっても泊まり込みができないんですよ。夜になると追い出されちゃうんです。学園祭の時ですよ？ だからバリケードに入って楽しいこと楽しいこと。

森：みんな楽しんでたなあ。生き生きしてましたよね。

大場：学園祭の準備期間の延長みたいなもので、集会もデモも少なくなりますからね、定期的にしかやりませんから、もうくっちゃべるし、あれほど楽しい、その思い出があるから未だに忘れられないですね。しかも250日間やったわけですからね。あれは完全に青春の思い出ですね。

ちなみに言いますと、闘争前のわが文理学部は加山雄三の映画「若大将シリーズ」のロケ地です。もちろん一般の学生が来ない時にやるんですけどね。僕は新聞部だったので休みの時も行ってます。だから、いくつかの映画を観ると文理学部の時計台が写ってるのがあって、懐かしいなと思うんです。実はその時計台がある1号館を占拠しましたが。多分、闘争の後は青春映画のロケ地にはなってないと思います。

森：三島は森繁久彌の「駅前大学」〔「喜劇 駅前大学」〕のロケ地だった。

清宮：「執行部」と言ってるんで、聞いてらっしゃる方は大学の執行部だと思うから。

大場：僕らが通常「執行部」と言ってるのは、学生会の、ほかの大学でいう執行委員会のことを

「執行部」と言ってます。

森：自治会執行部ですね。

清宮：大学公認だということですね。それと森の話したように、それと逆に支えようというグループがいて。結局、大学公認の執行部自治会があるわけです。それで自治会はまずいんじゃないかということで、影の存在を作ろうというんで森たちがいて、一方ではさっき説明があったように、そういうのを全部払って全共闘になる、グループ関係ない、というのがいて、もうひとつ複雑なのはつぶす右翼がいて、その右翼が見ておかしいんじゃないかと全共闘に参加するのがいて、一般学生というのはその外なんです。全然それと関係ない人たちが見てる。だからちょっと複雑な構造なんで。

森：単純に言えば右の人たちも、あまりにもやり方がひどいというか、そもそもは「日本精神」というわけのわからないことを信奉してたわけなんだけど、実態はこれかというのを目の当たりにしますと、学生会執行部の藤原さんの時なんか……。初めから経済を報告しましょうか。

経済学部は、実はずっと学生会執行部が何年も前からあるんです。1966年の古賀義弘さんという方が学生会執行部になった時に、従来の学生会というのはかなり学校の学生課に、あるいは、例えば委員長になると古田日大会頭が「御接待」する。「御接待」されるとどうということになるかという、とてつもなくおいしい食事と、学費以上のおこづかいを君にあげるぞと、領収書はいらないぞと、そこから始まる。ということで、代々学生会というのは、たまたま私が総合経済研究会という部に入ったせいもあるんですけど、わが部から出ておったんですが、66年の古賀執行部の時に、それを全部断ち切ったんですよ。断ち切って、やはり日大の学生の自治、というのは66年の先輩方は非常に勉強熱心な方々がおられたんですね。たまたま総合経済研究会はマルクス経済学の研究をかなり専門的にやるということで、もともとは近代経済学とマル経だったんですけど、それが分かれて、総合経済研究会はマル経を研究すると。これはたまたま日大で珍しいのは、戦後、山岡萬之助〔日本大学学長および総長、検事・司法官僚・内務省警保局長など〕という人が多分、戦犯追放で学長を辞めた後に呉文炳総長が来られて、どちらかといえば学者の方だった、しかも経済学博士だった。その呉総長に経済学を本格的に研究するための部として創立されたクラブではあったんですね。これは私も知らなかったんですけど、後で知ったことは、そこから先輩たちで大学教授になられた方が12〜3人おられるんです。のちに経済学部長になられる牧野〔富夫〕さんという方も総研であったし、というようなことで、代々委員長が出て、それで大学祭とかをリードしながらやってきていた。

ところが古賀さんの代でカッチリと学問の自由を求めるというか、例えば総研で中小企業の実態調査をして、大学祭で発表しようとした時に、「資本主義の矛盾を暴こう」なんていう張り紙をしたらストップをかけられる、ということなんで、古賀さんの代から学問の自由、学問の発表の場、集会の自由、学生の自治、というようなことをしきりに執行部発足と同時に始めたんです。で、初めてそういう活動をしながら「三崎祭」という大学祭に、芝田進午という法政の先生なんですけど、真っ向から日大を批判している先生を呼ぼうという

わけですから、当時の日大からすれば簡単に認めるわけがないのは当たり前話ですね、当然認められなかった。これをみんな若いし血気に燃えてるわけですから、初めは20～30人しか集まらなかったのが徐々に集まってきて、約1,000人近く集まったでしょうかね。私はたまたま委員長と同じ部の後輩なので、ずっと関わってるんですけど、執行部が日和っちゃって、たかだか2人か3人くらいしか中心になれなかった。それは学校に脅かされるからなんですね。で、結果的に妥協して大学祭には呼ばないけど後で呼ぼうということで手を打ちちゃった。これは妥協したとも言われるし、でも初めて芝田進午を呼んで大学祭やろうというテーマを掲げてずっとやった結果、1,000人近く集まったということで、それを総括して、やっぱり日大はおかしいということで、次の藤原執行部、これも私の先輩、総研になるんですけど、古田の反動精神は「日本精神」になるわけですけど、「日本精神」というと要するに国体護持、天皇絶対主権の流れから来てるわけですし、今の日本会議ですか、当時の古田は「日本精神」、日本会を志向してましたから、佐藤栄作が会長〔総裁〕でしたし、日大の場合は所謂かなり右の方々との、本人もそうなわけですから、特に児玉誉士夫なんかはかなり頻繁に大学に出入りしているということが、これは私の恩師の木村先生なんかとも対談もして記録があるんですけど、そのなかに名前が出てくるくらい、所謂右の方々との、日本のある部分の支援者でありリーダーであったわけですね。だから古田に対して「大学がおかしいじゃないか」ということで、「日大反動教育と闘おう」ということで、学生会を作ったと同時に経済学部への応援団の解散をやっちゃったんですね。当時経済学部の応援団、本部応援団があって各学部にもあるんですけど、これは大変なことですね、学部応援団を解散して部室を強制的に没収しちゃったんです。これはね、当時は僕らも認識が甘かった、その本質をわかっているようでわかってなかったんでしょうけど、若さでやっちゃったわけですね。その結果どうなったかという、執行部活動やるんですけど、一々バッチをつけて校舎に入るとか、それすらもやめろという決議をしてあるんだけどやっちゃうわけですね。そこで一々ぶつかって、ぶつかるとうすぐ本部から応援団が50～60人飛んでくるみたいなね。あっちゃこっちゃで絶えず殴られたり蹴飛ばされたり、そんなことが起こってたわけです。

1月20日くらいだったと思うんですけど、応援団が大挙して集まっているらしいという情報を聞きつけて、藤原執行部は外へ出るんですね。三田の方のお寺だとかあちこちの喫茶店だとかそういうところで会議をするようになって、学内でできなかったんです。それをずっと重ねて行って4月20日に羽仁五郎先生を呼んで、新入生と三島・文理から来る移行生の歓迎会を計画したんですが、いかんせん羽仁先生をお呼びしたもんですから、まあやっぱりこれも我々の認識が甘かったんですね。そういうことになると思わなかった。ただ羽仁先生は、私は執行部じゃないのに先生のお宅に伺ったんですが、「行ってもいいけど、僕は大丈夫だけど君たちの方が危ないんじゃないかい」と羽仁先生に言われたのを今でも覚えてるんですけどね。案の定、当日の朝から学生証検査という普段やらないのが、「定期学生証検査」という名目でやっていたんですけど、1時からの大講堂に400人ほどのその方々がすでに結集してた、全席を占拠してた。それで我々も知らなかったんですけど、執行部が

登壇しようとして、そこから机をバタバタ叩きだしたんですけど、羽仁先生が登場したとたんに「赤帰れ」「ジジイ帰れ」が始まってですね、確か金髪の女性だってことになっているんですけど、私見てるんですけど覚えてないんですけど、「全学連に結集しろ」っていうビラをばらまくんですよ。これはインチキビラで、執行部は「全学連に結集しろ」なんていうビラを作ったこともないんですけど、字を似せたインチキビラをばらまいて、それを合図にダーっとステージにみんな駆け上がって、執行部を蹴飛ばすわ殴るわが始まったわけですね。羽仁先生にはお帰りいただいて、その後今度はその会議場からあちらこちらに連れ込まれて、殴られるわセメント袋かぶせられるわ、木刀から、彼らは空手部であり相撲部であり、そういう連中ですから、さんざんシツチャカメツチャカに殴られたうえに、7階だったと思うんですけど、執行部の部屋に全員集められて、集中攻撃をさらに受けて、その後7階から1階まで階段を蹴落とされるんですよ、足蹴にして。それを見て、ところが多勢に無勢ですね、我々どうにもこうにも…執行部だけじゃない、多くもやられたんですけど、見てるしかなかったということなんですけど、それを見てやっぱり「これは絶対に許さない」というか、「こんな大学は大学じゃない、僕らを否定する場だ、否定する権力だ」というようなことで、それで絶対やると思ったんですね。それが67年4月20日ですけど、その後、藤原執行部は全員無期停学処分、学校を争乱させたという責任でですね、一方的に藤原執行部が無期停学になった。いわば執行部解体ですよ。

執行部が無くなっちゃって、日大はいろいろあるんですけど、執行部の上に本部中央執行委員会、「本部中執」というのがあって、学生会の本部組織があるんですね。その本部の奥山〔文朗〕って、今でも忘れませんが、なかなか恰幅のいいというか、すごい人がいるもんだなと思うんですけど、学生らしからぬ学生というかですね、人喰ったというか、古田に負けないような学生さんだったんでしょうから、その方が出てきて「大学にはやっぱり学生会が必要だよ」ということで、「そうです」と。学生会を作るために本部中執として経済学部長と交渉してあげるということで、「お願いします」ということで交渉してもらって、学生会を作るための準備機関として、「議長団を作りましょう」ということの了解もあって、そこまではこっちも妥協しながら、議長団を作った時に、議長は本部中執なんだけど、4人の議員は全部こっちの仲間で固めちゃって、ということで、それで一応議長団を中心にしながら次の準備をいろいろやっていくんですけど、その議長団が実は、藤原執行部のなかの1人を先に処分解除して、後藤健太郎という個人名になるんですけど、いわゆる傀儡^{かいらい}執行部を作っちゃうんです。多分、本部中執が出てきたのはそれが目的だった。それで傀儡執行部に我々は反対してるのに、大学当局がそれを認める、本部中執が認める、予算も解除しちゃうんですね。それが秋の10月の何日かくらいに、学級委員会を集めるということの後藤ら執行部の連中が言うんだけど、それを集めて後藤執行部を否認しちゃった、認めないという決議をしちゃった。で、これを追い出して、同時に11月の三崎祭の実行委員会を作らなきゃいけないということで、当時一緒にやっていた秋田君に委員長をやってもらって、三崎祭の実行委員会を作るんだけど、大学側は執行部じゃないからそれは認めないということで、これもまた何度も何度も集まって、だんだん少しは膨らむんだけど、その時

はまだ大勢でワツと行くまでにはなかった。結果的に大学当局に認められずに、三崎祭ができなかった。という中から、藤原さんの後の学生会をやるので、秋田君を委員長にして、私は執行部に入らなかった。というのは、絶対つぶされると思ってますので、つぶされた後どうするかを考えないと次の運動は考えられないことなんで、二段構えで行こうということで、私は裏に回って、とにかく秋田執行部を作ったわけです。

で、ようやく68年に入って、1月・2月はいろんな部の合宿だとかいろいろあるんですけど、4月のスタートから始まって、先ほどから言ってますように4月15日に20億円の使途不明金問題が出てきて、それに向けて4月くらいからあちこちで我々は走り回ってましたから、執行部に対するいろんな当局の非道もありましたし、それに反対して学生を集めてやらなきゃいかんということで、違法な集会だとか、ビラのばらまきだとか、落書きだとか、逃げ回りながらやっていて、4月15日の新聞記事が出たので、それを境に一回り大きく集まるようになったんですね。元々は古賀執行部による大学の民主化あるいは学問の自由、学問を自由にやりたい、当然ながら我々は学問を求めているんだという思いで闘ったものが、4月15日以降の20億円の使途不明金問題を境にしてちょっと変わるんですね。とにかく集まるようになったちゃった。それで今度は5月に向けてだんだん集まるようになってって、当局は教室の使用は認めないとかということで、集まる場所がないので地下集会に、地下室に小さな食堂があるんですけど、ただけっこう校舎が大きくて広いもんですから、そこで集会をするようになって、5月23日にいわゆる「赤狩り」ということで押し掛けられて、多分私の記憶だとその時に200メーターデモは、校舎から出たデモであるはずだなとは思ってたけど、初めてデモを組織したということなんです。その時歌ったのは校歌だったんですけどね。校歌を歌って、でもその日はね、インターナショナル歌いました、間違いなく。抵抗なく歌いましたね。5月25日に学生会の執行部と私と戸部〔源房〕君という、所謂裏方の走り回ってた2人が処分食らっちゃったわけです。処分と言ったって自宅待機処分なんですけどね。自宅待機しろと言われても自宅待機なんてするわけないんだけど、そういうことで処分受けて、それでまたみんなワツと集まったわけですね。

それで6月に入って、1,000人単位で集まってくるわけで、そうなるとう右翼・応援団の連中も手が付けられなかったわけですから、それで6月11日に校舎をなんと400人ほどの、木刀からチェーンから日本刀まで用意してですね、校舎を占拠したわけです。で、校舎の占拠でシャッター下ろしたところをこじ開けていったら大乱闘になったわけですね。5階から鉄線や椅子が落ちてくるわ、砲丸を落とすわ、ガラスの破片が飛んでくるわで、あの時重傷者も出るくらい、100人くらい怪我人が出たわけで。ところが何があれかって、4月15日の税金20億の問題と、6月11日に校舎を占拠されたということで、4月15日時点でかなり各学部で、文理もそうですけどいろいろくすぶってるわけですから、いろいろな準備や闘いが始まっていたから、それが5月23日の200メーターデモで各学部の皆さんが「これはやろうよ」というようなことになったんですね。5月23日の200メーターデモはそういう意味で言うと全学部のみんなが集まるようなきっかけになったのと、6月11日のやつらの校舎占拠によって全学部の闘いに全共闘になるきっかけになった、というふうに私は

思うんだけど。

友澤：せっかくなので、皆さんご自身のことも伺いたいんですが、森さんは三島にまず入学されて、でも東京に…。

森：65年に三島に入学しまして、1年間は教養学部を三島で、楽しくというかですね、自分は〔出身が〕東北の田舎なものですから、暖かいところがいいなってことで、楽しく1年間を過ごしまして、次の年の4月に三崎町の経済学部校舎に移るんです。で、移った時に、たまたま三島の寮に入って〔いた時に〕副寮長だったものですから、経済学部からクラブのオルグが時々来るんですね。それはまずは寮長や僕らが対応するというので、総合経済研究会という経済学部の研究会から、のちに執行部になる藤原さんという方が、藤原さんも秋田〔明大〕も広島〔出身〕なんですけど、部のオルグに来ましてね、寮で部活のオルグをさせてくれということで、ふれあった時に藤原さんから「君たち、歴史哲学とはなんぞや」とか言われてですね、やけにかっこつけてるねえ、みたいなもので、総合経済研究会いいかもねというんで、66年に経済学部に移った時に総合経済研究会に入ったわけですね。そしてたら代々そこから委員長が出て、もろ関わっていかなきゃならないというようなことだったので…しかも、総合経済研究会は、部活は20何部あって、総研なり理研なりがリーダーシップ的な立場にあったんですね。だから各部長や部員とのふれあいも本当に濃密にというか、それは古賀執行部の時の三崎祭から始まって藤原執行部のひどい状況、藤原執行部の時の三崎祭が認められなかったんだけど、ということで学級委員、部員、部長らとのふれあいをすごく持つ立場になっちゃったんですね。それで、いつの間にかしらんけど…ただ、私は執行部に入っていない。それから全共闘にも肩書を持っていないんですわ。そりゃ裏で指揮してたっていえば、それはそういうことにはなるかもしれないけど、何で入らなかったのかよく覚えてないんだけど…委員長でなければ別にいいしなという思いだったのかもしれないのでよくわからないんですけど、今から考えると何の立場もなく、「全共闘でございます」ということに。

友澤：池上さんの場合は体育会系だとおっしゃってましたけど、それは全然別の系統…。

池上：ここにいる資格があるかどうかわかんなかったんですけど…。

大場：6月11日に最初のゲバルトをやるわけですね、僕ら全共闘が。要するに外側に全共闘の部隊がいて、初めて行動隊という突っ込む部隊がいるんですけども、彼はその行動隊を2階か3階から見ているんです。（池上：3階。）つまり向こう側に動員されてるんですよ。

池上：前の日に学校側と先輩から連絡があって、「明日の授業は朝から来てろよ」と。行けばこういうことになるかもしれないから、ということで。

森：日当貰ったんじゃないの。

池上：僕は貰いません。日当貰ってる人もいます。多分OBや父兄会の先輩たち、ヤクザみたいな人たちなんですけど。僕らはまだ1年生だったので、「まあちょっと来いや」とか、空手部は空手部で集められるから、いずれにせよ多分わからないです。僕は体育会系で、空手部は途中ですぐに逃げました。闘争が始まったら2ヶ月しか行ってません。嫌気がさしてあきれかえっちゃったんで。ここで話すのはあれなんですけど、それからちょっと僕大学を

離れるんですよ。要するに、その前に全共闘の諸君といざこざを起こしてますので、いと危ないなということで。また戻ってきて全共闘のヘルメットをかぶる。やはり大学の途中、合宿の前の夏なんか、学生服はまだ着てましたので、どっちかという心はまだ右翼なんで。全共闘の人がカンパしてるんですよ。見ててかわいそうだなと思って、たまたまおこづかい1万円持ってて出した瞬間に「あ、お前」って指を差された。やっぱり覚えてたから行かなかった方がよかったなと。そんなことで、その後から全共闘になるんですけど、なかなか怖くて行けなくて。

鈴木：1万円出したんですか。

池上：はい。

鈴木：当時の1万円だからすごいよね。

池上：何となく罪の意識がありまして。砲丸が落ちたという話で、彼は農獣医学部の1年生です。

大場：落とした人ですよ。

森：本当に砲丸を、5階からだと思うんですけど。

池上：彼は狙ったつもりはないんだと、ひょいと投げちゃったら、新聞には出るわってんで、彼も途中からいなくなりました。半分はよくわからないんです、そういう意味ではね。本当の国粋であるわけではないし、一般学生に近いけど、先ほど言った「大学を壊す悪いやつらだから」という感覚ぐらいだったから、そういう仲間はけっこう全共闘になっていくんですよ。

森：6月11日の午前中に学部長が応援団とかの連中400人の前で訓辞してるんですよ。「不逞^{ふてい}の輩から大学を守る、君たちががんばってくれ」。で、今それをまとめようと書き出してるんですけど、日大の場合は古田のやり方だと思うんですけど、彼も柔道部上がりで、児玉誉士夫なんかと…というのは、日大には戦前に今泉定助という神道思想家の学園があったんですね。知らなかったんですけど、今回書くので調べていったら、皇道学院というのを戦前に、山岡萬之助の時なんですけど、皇道学院を作って、そこに今泉定助さんの国家神道ですね、「日本精神の根本は個人の自我にあらず、彼我一体皇道絶対から始まる」ということで、「天皇陛下の御心が日本精神」と、こういうことになるわけなんですけど、それを古田にしても児玉誉士夫にしても、それを非常に熱心に聴講しながら事務員になって、事務員から理事に上がっていくわけなんですけど、その過程の中で彼は学校の争乱、闘争が起こった時に治安部隊的なことをやってるわけですね。多分その方法だと思うんだけど、各学部にというか、特に経済はそうなんですけど、本部直結の学生課なんですけど、学生課で日頃は本当に学生のためのいろんな作業をしてくれるんですけど、本部直結の職員が2人いるんです。

池上：本部ってのを先生たちに説明しないと。多分ちょっと普通の大学とは違うんで。

森：各学部の上に本部があるわけですね。で、古田会頭が本部のトップになるわけなんですけど。

大場：今の企業システムで言うところホールディングカンパニーですよ。

鈴木：大学だと法人とか言うんですよ。

大場：そうですね。だから各学部は事業部なんですよ。

池上：建物は水道橋にあります。

大場：今は市ヶ谷。

池上：当時は経済学部と法学部のそばに本部がありました。

鈴木：駅のそばにありますよね。

池上：あれとはまたちょっと違うんですけど。あともうひとつ面白いのが、体育会系やクラブ、サークルや同好会ではなくて学校側から体育会と認められたものを「体育会」というんです。それはあっちこちの学部にあって、それが集まってきたやつを「本部体育会」。

森：本部が各学部につながるようなシステムになっていて、それを牛耳ってるのが古田ということで、それは非常に現代的な統治機構、治安体制維持機構であったんだろうなと。本部の学生課から直結の〔職員〕が2人ほど、もと体育会系の、いるわけです必ず。彼らは何をするかというと、いざ鎌倉という時には飯の手配だとか、動員の連絡、^{へいたん}兵站動員、我々が大学占拠してわかったのは、日当配った封筒がいっぱいあるとかね、そういう本当に直結した…6・11の時にはすでに本部直結の2人は戦闘服を着て、角材にタオル巻いてですね、もうすでに用意していた。これはたまたま同じ総研の先輩のある大学教授がいるんですけど、これが同じ学内でいるものですから、見てることを私も聞いたので間違いないと思う。実際に乱闘に入ってきてますからそうなるんですけど、そういうのが各学部の学生課にいたんです。それが古田の支配体制なんですね。

鈴木：本部直結の事務の人というのは各学部にはばらまかれていたんですか。

森：全学部かどうかはわかりませんが、少なくとも経済学部には2人はいました。文理はどうだった？

大場：僕らの時には井出〔洽〕さんという人が学生課長で、闘争中に日大新聞の求めに応じて一文書いたんですけど、ちょっと違うんですよ。僕の記憶だと十数人学生課の職員がいたんですけども、正規の職員は自分を含めて2人だけだったというんです。あとはパートタイマーとアルバイトだと、これで1万人を超す学生をどうやって管理するんだって愚痴ってるんですよ。しかも彼は古田を非常に尊敬していながら、古田が禁じてた教職員組合のメンバーなんです。なんでメンバーかという、赤字大学を再建したという意味で〔尊敬していた〕、ただしその後の古田会頭に対しては批判的なんですけどね、学生が一生懸命やってもそういうところは見ないと、劣悪な福利厚生を見せたいけど、なかなか学部の上級者が見せないとか、それで組合に入ると。ひょっとしたらこれは僕の穿ち過ぎかもしれませんが、学生たちに対する暴力対策要員というのはいたんだけど、多分各学部には配置されたいと思うんですけど、彼らは本当に正規の職員だったのかどうか。契約職員あるいは嘱託、臨職だったんじゃないか。そうすると事が起きた時に切りやすいわけですね。「あれは正規の職員じゃない」。彼らは正規の学生課の事務なんかやらないで、多分応援団のOBとかそういう連中を集めて、事があると民主化をやる学生たちを狙い定めてテロると、そういう役目だったんじゃないか。ただ文理の場合は経済ほどひどくなくて、学生課長の井出さんというのが必死になって押さえ込んだんです。つまり、事件になると上にどんなことでも報告しなきゃいけないわけですよ。報告すると本部から叱責があるわけですよ。それを糊塗するため、僕らのことを考えてるんじゃないんですよ。彼は中間管理職として

必死になって押さえたんです。

池上：本部と直結で話ができるから、こちら側から見ると「本部の職員がいつている」、そうなるんですよ。各学部も同じだと思います。

森：恩師の先生と久しぶりに会話した中から出てきたんですけど、日大には当時、児玉誉士夫もそうなんだけど、中国から引き揚げてきたようなふらついているというか、右翼的な大陸浪人たちがゴロゴロいたというんですね。ゴロゴロいたその中から実はピックアップして、財務部長だかやった、名前が出てこないですけど、ピックアップして採用するとか、そういうことをやってますので、あるいはそういうのを学部配置してたのかもしれないですね。よくわからない。経済の場合は、明らかに2人は本部直結的な学生課職員でしたけどね。

鈴木：大陸浪人みたいな人を非正規でとってということですか。

森：そういうことがあったのかもなと、ふと思ったんですけど。

池上：体育会系で出てきた人間と、それから経済学部でゼミ…坂田って覚えてます？

森：坂下じゃなかった？

池上：とにかく、学校側に都合のいい彼らを雇って、それを育てていくというのが日大のやり方だったのかなと。これはもう間違いない。

池上：1, 2年上かな彼は。

森：じゃあ坂下だ。私の部の副部長だ。

池上：そう、かなりキレる、日大生にしては頭のいい人でした。

池上：学部に入っていったでしょ、職員として。

大場：これは農獣医学部の人に確かめなきゃいけないと思うんですけど、確か山口二矢、浅沼〔稲次郎〕委員長を〔刺殺した〕、彼の父親が教員で農獣医学部にいたというのは言っていましたね。だから、そういうピックアップの方法もやってたんでしょうね。

池上：東大の人たちの闘いと〔違って〕とりとめもない話で、山本さんみたいに理路整然とできないというのは、僕たちはそういうなかで生きていく方法を見つけてくんでね、簡単に言えばきちっとこうやって学生が先生たちの前でしゃべりたいとか、学園祭をやりたいとか、もうひとつは執行部がそれをもっときちっと考えてやってきたのと、見てきた学生とが融合してって、はっきり言って20億円の問題で大きなうねりになってったんじゃないかなと思います。

大場：さっき池上君が「赤いジーパンをはいてると赤だ」という話をしたけど、これに似た経験は僕もしてるんです。多分、闘争前の67年だと思うんですけども、たまたま『平凡パンチ』から抜け出したようなスタイルで、赤いセーターを首に巻いてた。で、明らかに応援団と思いき長ランの、ここにバッジを付けてるやつから火のついたタバコを投げつけられた。彼らは平気なんですね。普通の学生だったら多分殴られてたと思う、生意気だといって。多分赤いセーターが問題だったんだろうと思います。ところが、僕が新聞やってて、彼ら応援団と話してたのが体連の役員やってたんです。僕が新聞やってるのわかってるから、こいつを殴ったらまた大変なことになるって必死になって止めてるんだけど、応援団員はもう興奮しちゃってるわけですね。たまたまその体連のやつが止めてくれたから僕は殴ら

れなかったんですけども、そういう状態なんです。何もないですよ、その時に。ただたまに通用門に向かって歩いてる時なんです。そういうわけですからね、比較的穏やかだと言われる文理学部ですらそういう状態なんです。彼らは平気ですから、人前で殴ったり蹴ったりするのは。

池上：それが日大闘争のほかの闘争と違うところです。

大場：原点ですよ。

池上：多分各学部同じようなことがいっぱいあると思います。

大場：あとひとつ、応援団について言うと、僕らのなかで「ペーパーテストの時に、学生番号を書いて、学科を書いて、名前を書いて、最後に応援団と書くと単位もらえる」という話があった。これ、皆さんお笑いになったけど、私も冗談だと思っていた。僕とたまたま同じ下宿の、僕が2年生の時だと思うんですけど、経済の1年生が血相を変えてくるんですよ。「今日変なものを見ました」と。彼のクラスのなかでペーパーテストをやった。そういう伝説はずっと敷衍してますから、明らかに応援団と思われる長ランの、となりの学生がふと覗き込んで見たら、白紙の答案に同じように言われた通りに書いてるんですって、「応援団」って。鼻先でせせら笑ったらしいんですよ、見てたやつが。そのことはあんな馬鹿な応援団でもわかるわけですよ、自分を馬鹿にしているのかって、いきなり胸ぐらをつかんで殴ったっていうんですよ。テスト中ですよ。監督の先生がいるんですよ。その場面を僕は見ちゃったと、「大場さん、あの噂は本当だったんですね」と。僕は見てないんですけど、見たやつは確実にいるんです。

森：教授というか、私の唯一マル経のゼミの先生になるわけですけど、それはその藤原執行部が襲撃を受けた時に、その先生も殴られてるわけだし、闘争の69年くらいでしょうかね、関東軍ができた頃かな、毎週5、6人の右翼の人が来て、「お前もう辞任しろ」というんでさんざん脅かされてですね、というようなことを、教授でさえもそういうことを受けてるということですよ。まあ、たまたま若手の教授だったので、学生指導副委員長か指導委員長をせざるを得なかったんで、我々の相手になったわけですね。だからゼミで…でもゼミはせいぜい10%かそのぐらいしか入れないわけでしたから。ただゼミで教わりながら闘争の場に行くと「先生、それはなっていないじゃないか！」みたいな、そういうわけのわからない、「話が違えだろ！」みたいなね、そういうことになったんですよ。だから、先生はそれを今何もおっしゃらないし、藤原さんなんか先生をつかまえて「国家権力の犬だ！」とかいうくらいのことを言ったりもしてるんですけど、今は笑って先生とそれを話し合えるということも非常に楽しいと思うんですけどね。

大場：つい2、3日前ですよ、日大の教授が山口組から借金。彼らはあんなの全然平気なんです。ああいう感覚ですよ。良心的な先生もいるんですけど、あれは多分あそこで頭下げてるのはもう偽善的ですよ、僕らから言わせると。ああいう体質がずっとまだ残ってるということなんですよ。

池上：闘争の中に入っていくんですけど、情報の方の話も少しした方がいいですよ。実は私は情報のなかでもかなり若手で、68年に入って、全部は参加できなかったんですよ。本当はこ

ここに、局長って冗談で私たちは言うんですけど、彼に来てもらえばいいんですけど、語ってくれる人が少ないんです。先輩たちに頼んだんだけど、「今更いいよ」とか「覚えてないよ」とか、そんなこと絶対にないんですけど、何で話をしてくれないのかなと。歴博の話もしてるし、ほかで本を作ってるというのも私は一生懸命に話をしたんですけど、「お前行ってこいよ、わからんことがあったらそれはそれで考えるから」ということで、私は代理ですよ。それと闘いのなかでということ、情報というのは多分僕が思うというか、山本さんも言ってるんですけど、他大学では無いものだと思います。それは最初に言いました、11学部の連絡をまずどういうふうにとるか。それから、右翼はいつ来るんだろうとか、機動隊がすぐに6月11日から入り、バリケードに入って、いつバリケードを撤去に来るんだろうとか、そういうようなことから疑問が始まったので、秋田さんが直接そういうものを作ったらどうなのかということで、当時の4年生と3年生と2年生と、つかまえて作ったのが情報局なんです。で、考えたのはまず警察の傍受、簡単に言えば盗聴ですよ。それをどうすればいいかということで、歴博に提出した1台、もう1台あったんですけど古い木でできたもの、それはちょっと見つけることができませんでした。それを毎日毎日、バリケードがある時はバリケードの中で聞くんです。で、だんだんだんだん符号がわかってくるにつれて、いろんなことがわかり始める。

ほかに実質部隊としては、学部単位に「今日は5人出してくれ」「今日は3人くれ」というふうにして、今度は足で稼ぐ。要するにレポ隊といって、どここの交差点を曲がって、どここの前に機動隊何台、私服が何人、私服いくつがそっちに向かった。昔携帯がない時代ですので、十円玉をポケットにいっぱい持ってくるんですよ。大場さんもその時にレポ隊としてかり出されてる1人なんですけど、それをずっと綴ったのがレポノートなんです。盗聴器は時間があれるのでおおざっぱに話すと、（大場：無線傍受器。）僕は盗聴器と呼べるんですけどね、それをずっと持って、1台だけじゃなくて2台か3台持ってるんですよ。各方面隊の聞くわけ。もうひとつは、情報機関で、もう古い話なのでアジトを作るわけ。バリケードの中だけではなくて、各機動隊の前とか、たまたまアパートがあったらちょうどいいんですけど、そこでアジトを作ってそこから見張りながら、どっちの交差点を曲がるとすぐに次の電話、例えば世田谷通りのそばのアパートにいるやつに連絡する、世田谷通りのどこどこに曲がっていったら、これは間違いなく文理に行くとか、法政の手前から法政を通過っていったら日大に行くとか、これが機動隊に対して。あと、右翼に対してはね、けっこう危ないんでね、脚の速い連中が。学部の人には頼まなかったと思います。それは一番いいのは合宿所を見張るんです。で、なんかゴソゴソ、ゴソゴソといっぱいいろんなやつが集まってくれば、これはちょっと…で、出入りが激しくなったある日、ぽっと出て行けばどこかに行くよと。それはまだね、結局、江古田事件ではうまくできなかったんですけど。

それとあとは、ゆくゆく69年に入っていくと、秋田さんの警護、それから全学連に対しての連絡、要するに上との話をどうする、全学連はどうするかとか、最初は連絡ですね。各学部にも昔ですから交換器ありますよね、そこに情報の人間がいつも張り付いてるんです

よ。それで情報のやり取りをする、というのがおおざっぱな…ですから各学部仲間になります。ひとつの経済学部が、さっき言った大学の本部じゃないですけど、要するに本部になるわけですね。そういう形とあとは、救援会や救対との連絡、要するに事務方ですね。それをひとつは情報局と言われますけど、だいたい事務局と呼んでました。そうですね清宮さん、話してる時は事務局ということで清宮さんとか救援会の方にお会いして、いろんな話をする。

清宮：Nプロといたりとかね。

池上：日大のNでNプロダクションといって。

清宮：Nプロの話だけ。救援会という名前を使うのがちょっとまずかったので、公には私のところの名前が出て救援会なんですけど、そのほかの中心になる場所が新宿にありましてね、そこをNプロダクションと。芸術学部の人がいたので、プロダクションの名前を使うのに慣れてたのですね、それに日大のNを付けてNプロというふうに略して、それが通常の連絡はNプロ、公式の名前は私の名前や住所が載ってる。

大場：日大全共闘って、みんな外部に説明するのは面倒くさいからそう言っちゃうんですけど、組織としては二つしかないんです。全共闘の執行部の下に救対と情報しかないんです。で、常時執行部の連中が全共闘の本部を置いた経済にいるわけじゃないんです。田村君はほとんど文理にいる、矢崎さんも法学部にいるんです。法学部と経済は近いからいいんですけども。それで時たま全共闘会議という各学部代表者会議があるんです。だから、要するに手駒がないんですよ。手駒はもう情報しかないんです。救対は救対でやらなきゃいけませんから。そうすると、一応情報と言いつつも事務局的な仕事を全部やらされたんです。

森：みんなそれぞれが自分の得意なというか、やりたいものをそれぞれ見つけてきてですね、勝手にやるんですよ。これは非常に円滑にスムーズにというか、だからバリの中が本当に楽しかったという言葉になるんですけど。ひとつは掃除がきちんと行き届いてました。まずね、電気・水道は止められなかった、これは不思議なんだけど。私も今まとめて書いてるんだけど。電話も来てた、その電話線は全部張り直して、それで各入口の詰め所に繋ぐとか、三闘委四闘委に繋ぐとかね、電話線は全部張り直すとかね。それもできるやつらがやっちゃう。それと、図書室を本持ち出されないように封鎖するとかですね、不思議な…それでね、ちょっと珍しいと思いますけど、なんと食堂を作ったんですよ、食対ができて。これは3年の連中が始めたんだけど、というのは何でかといいますと、バリで6月7月暑いもんですから、のどが渴けばお店に買い物に行くとか、飯喰いに夕方出るとかすると、車でスーッと来てですね、3人くらい乗ってまして、タオルに石ころで滅多打ちにあうんですわ、あつという間に。1人は私の友達が2ヶ月ほど入院せざるを得なかったんですけど、そういうのがあちこちでしょっちゅう起こるもんですから、危ないので食堂を作ろうというんで、作ったんですね。ちょうど2階の教授大会議室があって、50～60席ぐらいあったと思うんですけど、そこで3年の連中が料理をする人とかですね、食券を作る人とかですね。食券を発行してたんです、なんとかフライとか。で、田賀〔秀一〕先生の本に書いてあるんだけど、スイカ1切れ15円とかいうのがメニューに書いてあったらしいんですよ。まあ旨くもな

かったと思うんだけど、常時泊まってる人はノートにサインをしてですね、サインで喰った。このノートが実は9月4日でなくなっちゃったから、多分食費清算してないのがいっぱいいるはずなんだけど、私もそうかもしれませんけど。

池上：それはもしかしたら歴博に入ってるかもしれない。何冊かね、財務なんとかという名前で、ノートにペタペタ、ペタペタ貼ってあるんですよ、領収書とか。その中にちらっと見て覚えがあるんですよ。全部は見てないんで、もしかしたら歴博の方に送られてる可能性なきにしもあらずです。

森：食堂を作ったらどういうことが起きるかといいますとね、デモを組むじゃないですか、ところが腹減ってると飯食いに行っちゃったりして欠けるんですよ。欠けるとしょうがないから牛乳とパン買ってきたりして渡してたんですけど、食堂を作ったらちゃんとみんなここで喰うもんですから、隊列がいつの間にか揃うんですね。これがねえ、多分ほかの学部にないと思います。

友澤：作っているのは女性なんですか、男性なんですか

森：男性でした。

池上：その質問なんですけどね、短大闘争委員会の女の子たちが手伝ったんですけど、最初は各学部でも女の子だったみたいです。僕は不思議だなと思うのは、女子連絡というのがあるんだと思うんですよ、どこかに。学部毎に急に、なんで遠い学部の子がね、経済学部の女の子と両方知ってるのかな、というのが、これは女子にもう一度よく聞いてみなきゃいけないんですけど、女子連絡というのがちゃんと裏であるんですよ。どうして女が作らなきゃいけないのかっていう討論会をやったのを覚えてます。

森：初めは男だったんだよな。

池上：経済は男だからあまり文句が出なかったみたいだけど。

森：女性が少なかったからね。

池上：芸術学部はかなり女子の方が多かった。

大場：今度芸闘委の眞武君を連れてきます。彼はそういう女子たちに突き上げられて「大衆団交を受けた委員長は全共闘で私一人だ」って言ってます。

森：経済は無かったよね。

大場：なんで作らされるんだというんで。委員長だから彼が命じた訳じゃないんだけど、責任者として糾弾されたと言っていました。

森：ただ、ほんとうに食堂によってああいうふうになるとは思わなかったですけどね。経済の場合は自主的に3年の連中が考えて始めたんですけどね、別にやれと言ったわけじゃないんですけど、非常にそういう意味ではみんなそれぞれ自分の出番を持って生き生きと過ごしていましたね、バリの中は。

荒川：バリの中の女性たちの比率はどれくらいでしたか？ 時期によっても違うでしょうけど。

大場：文理学部はけっこういましたね。

森：経済は少ないよなあ。

大場：救対の女子は泊まり込んでました。ほとんど救対は女性なんですけどもね。あとは…男女

別で統計はとってないですね。

池上：でも、経済学部はほとんどいなかったです。短大の子が…。

森：でも10人くらいいたと思う。

池上：学部の子が2人に短大の子が7～8人ぐらい。

森：自主講座やってる時に必ず来てくれた女性が4人。

池上：その時はね、でも泊まるのは少なかったんじゃないかと思います。

大場：変な話ですが、通いは多いんです、文理は。通いというのは、要するに泊まり込まない。それで、午前中にやってきて、文理は食対がなかったんですよ。で、彼女たちがみんなお弁当持ってくるんです。一応キャンパスがあるから、普通入れない芝生のところでピクニックやるわけですね。だから食対がないんです。多分、唯一食対がない闘争委員会というのは文理だけだと思いますけど。けっこうおいしいですよ。サンドイッチとかおむすびとか持ってきて、それで夕方帰るんです、あたかも授業があるように。多分、彼女たちもけっこう楽しかったんじゃないのかなと思いますけどね。

森：経済はね、池袋か新宿のクラブだかバーだかでアルバイトしてる、ちょっと切れるようなやつがね、包丁握ってやってたんじゃないか。だからおいしくなかったのかもしれないなあ。

荒川：池上さん、先ほどの情報局の続きを。

池上：何か質問していただいた方が楽なんですけど。

荒川：先ほど右翼に対してと言われましたが、右翼というのはその前から話が出ている応援団とほぼ同義なんですか？それとも体育会…。

池上：右翼は後半では、バリケードとられた後は3号館というところに右翼の巣があるんです。

荒川：その右翼の実態なんですけど、構成している部分は。

池上：実態は体育会系が多いです、各学部の。それで、江古田事件って11月に起きるんですけど、日大全共闘の芸術学部闘争委員会対「関東軍」という名前です。彼らは自分たちのことを「関東軍」と位置付けて、ヘルメットに赤いバッチンをつけるんですよ。で、もうその頃はきちっとした乱闘服をピシッと着まして、それでやるんですけど。今位置付けと言われますとね、多分体育会系なんです。芸術学部の時の彼らが最後に負けて捕虜になったなかには、3人か4人アスリートがいます。68年末から69年に入ると、まともなアスリートは参加しなくなります。それはそうですね。運動で入ってきたやつがこんなくだらな何万か貰ったくらいで、下手すりゃ下級生は一銭も貰えないでくっついてくだけですから。69年からは関東軍といっても、各学部の使えない運動部員、それからOBの先輩たち、これがガードマン会社作るんですけど、本当の右翼、思想的右翼も入ってきます。それが流れですかね。だから私たち全共闘が右翼と言ったりするんですけど、体育会もいるしそのなかで一説にはヤクザも、要するに日大OBですよ、そういう意味では。それで若いのを連れてきたとか。ですから何々防共挺身隊とか愛国党っていうのはきちっとしたものじゃなくて、多分それも関連はあると思いますけど、大学の古田会頭が組織していく、それが一番最初に尖兵になるのが体育会系だと思います。これが面白いことに、私は体育会系で、すぐにいなくなったからあれなんですけど、なかにはシンパってのがいるんですよ。それを情報もらったり、電

話かかってきて「こうこうこうだから、ちょっと集まってるから気をつけた方がいいんじゃないか」とか、さっき言った合宿所を見に行って張り付くとか、あとは話を聞いて、やはりたむろってる喫茶店を見張ってるとか、そのぐらいですね。やっぱり一番組織的にやったのは、機動隊に対してのレポです。

道場：先ほど池上さんが1万円カンパした時に「あ、お前」と言われたとおっしゃってたじゃないですか。それで、何人か見るに見かねて右翼から全共闘になった人がけっこういるよ、とさっきお話されたと思うんですけど、そういう人たちが「お前」と現認されてる立場から全共闘側に行く時に、何かちょっと詫びを入れるとかですね、「こないだはすまん」とか言うとかですね、どういうふうにして入っていくんでしょうか？

森：仁義を切るわけじゃないですからね。

池上：私の場合は途中からで、「お前」と言われたのは、6月11日に実は彼が下にいた時私が3階にいて、目を合わせて指を差したら「来い」という。まだ若いですからね、「お前生意気だからやっつろうじゃないか」と私は降りてって、そいつをこっちに呼び出してひっぱたこうかなと思った時に、大学側の校舎へ全共闘の諸君が乱闘に入ったので、私はそのまま引き下がったんですよ。だから運がいいことに、中には最後までいなかった。その時の彼がきちっと私の顔を覚えていて、夏休みになった時に「あ、お前」。それから闘争に入った時は、僕はヘルメットを短大の人に話をして〔借りて〕行ったんだけど、何人か覚えてました。「お前、こっち側に来たのかよ」。そんなにね、これはちょっと悪いことしたかなと。砲丸落としたやつも「あれ冗談なんだよな」とっていうくらいな感覚なんですよ、彼に言わせるとね。彼は全共闘にはならなかったけど「もう全共闘には手を出さないよ」とか、そういう感覚で、詫びを入れていくというのは、その後の先輩でもいなかったんじゃないかな。要するに、一緒に一生懸命闘えばそれでチャラでしょという感覚ですかね。全共闘側から右翼になったというのは聞かないなあ。思想的に右翼になった人はいるかもしれません。

今でも、さっき冒頭で言いました通り、私はけっこう反原発に行ったり、その心は今でも残ってて、何かやらなきゃいけないなと思ってね、モニタリングっていう、話がはずれますけど、福島南相馬に行って数値を測ってその記録を一生懸命残してるんですけど、その時もいっぱいいますよ。ポロって会ったら「お、元気？」と体育会系のやつとかね。多分私が会いたくないのは、関東軍の上の人たちとは今でも怖くて会えません。本格的な連中で、僕を裏切り者と言った連中とは会いたくないし、ここに来てるって知ったら何か…多分何もないと思うんですけど、その怖さはよく知ってます。でも、全共闘の諸君はそのままですなり「お、お前こっち側に来たのかよ」。多分ね、いっぱいいるんですよ。

友澤：そっち側へ行こうかなと思うきっかけはあったんですか

池上：ずっとね、「変だな、変だな」と。

森：だって、5月23日までに一方的にシツチャカメツチャカ殴られてやられてるわけだから。服をやぶかれるわ、突き飛ばされるわ。

池上：それを一緒に呼ばれて行って見てるんですけどね。僕の友達の部員の連中も「え、いいのかよ」というのと殴っちゃうやつと、殴っちゃったやつはもうそのまま全共闘には行かない

で。「え、こんなしていいのかな」、それからずっと何年もいた連中でも「こんなことしていいのかな」というのはあると思いますね。一方的に殴って一方的にやってるのが、それが赤だというから殴ってる状態なのに、こないだまで同じ教室にいたやつを殴れるのかよっていう感覚ですね、殴られてるのを見ると。そうするとやはり「おかしいんじゃないか」と。それから古田「先生」がお金を使ったことに関してのものすごい憤りですか、腹立たしさ。それはだから、さっき執行部とちょっと一線を引いたのは、執行部と違う一般学生や体育会系の僕たちですら、許せない理不尽さを感じまして。私その後すぐ逃げて、学校も行ったらずい、バリケード入るんでね、行くところがないからアルバイトをしながら遊んでたわけですよ。その時に全共闘の人がよく来て、遊ぶところや呑むところで会うたびにいろんな話をするわけです。「お前な、この世の中はな」。聞いてるうちに「お前ちょっと来ないか、顔出してみろよ」というのが、夏が終わってからなんですけど。私は本当に参加したのは69年です。で、できることはっていうのは、なぜ情報になったのかっていうのは、多分運動能力がものすごくいいんでね。それと、今度は学校に入れなくなっちゃったんですよ、授業再開になったから。それは全共闘のヘルメットを春かぶってたのを、どっかで右翼のやつが見てたらしいんですよ。で、授業再開になって、半分はよかったなぐらいで大学に行ったらすぐに呼び出されて、取り囲まれて、「お前全共闘にいたのはなんなんだ」。その時に何人かの人が止めてくれて、「お前当分来るなよ」ということで大学にまた入れなくなって、行くところがないと。それで情報部の連中が「来ないか」と。で、某マンションに連れて行かれて、それから全共闘のなかでも情報局をやるようになった。ただ、僕に言わせれば、全共闘の人は、執行部の人もそうなんですけど、よく信用したなど。その頃まだ情報は各学部の連絡網をやってるし、学校側を見張っていろんなことをやっている真ん中の、中枢部のアジトのひとつに私を連れてったということ自体がもう…だから、多分アホなのか、心が大きいのか。

大場：アホなんだよ（笑）。

池上：アホなのか、多分、闘いの中で一緒に闘う人間を信頼する心があるんじゃないかと。

森：ということなんだろうな。

大場：よく言えばね。

池上：で、私はそのまま社会に出るんですけど、その時のあれがずっと心に、「どうして俺はこういうやり方してんだろう」というわだかまりがずっとありました。

森：来るもの拒まず的ですね、全共闘は「来い」とも「集まれ」とも言ってない。

池上：面接もなければ就職試験もない。その日一緒に隊列に横にいてデモに加わっていれば全共闘なんですよ。何万の全共闘の諸君は、石を1回投げた人もいれば、先輩たちみたいにバリケードに行って1年2年ずっといるのと、私みたいに出損なって6年間ずっと大学に居残っているっていう。要するに僕の場合は不完全燃焼なんですよ。先輩たちは68年の一番華々しいところを生きているんでね。

森：またそういうことを言う（笑）。

池上：私はその斜めで見ていた。ただね、大学で言われたのは「彼らは赤だよ、赤だからやったん

だよ」と。その意味はよくわかりました。藤原執行部もそうだし、一部分の執行部が一生懸命何かの闘争をやろうとしていたのは間違いないですけど、多分それだけではないと思います。秋田さんのアジもそうなんですけど、ちょっと変わったアジでした。「僕たちのお父さんやお母さんが一生懸命働いたお金で学費を払ったのに、大学は何をしてるんだ」、あれが一番インパクトがありましたね。多分あれは普通の学生、僕は普通の学生以上の右寄りの学生ですけど、それでもインパクトがあった。もうひとつ、全共闘に行った時に、「おうお前、なんだ経済の体育会系か」とか言って、いくらでもそういう人が転がってるんです。俺空手2段なんだよとか、剣道3段だとか。だからとっても入りやすいというか、入っても詫言を入れずに、すんなりと入っていつか自分も全共闘で、先輩が言った通り僕も今でも全共闘だと思ってます。解散式もしてないし負けたつもりもないんで、今でも全共闘で何かをやっていききたいな、という生き方ですかね。

森：政治党派じゃないんでね。

根津：右翼を構成する体育会系の中の序列というのは、多分応援団が中心なのかなという気もするんですけど、応援団と空手部と相撲部と、古田会頭の〔出身の〕柔道部と、その辺の右翼を構成する体育会系の、運動を鎮圧する側の序列と意思決定はどうなっていたのか、ただ単に大学から指示されたことを…。

池上：私が知っている限りでは、OBや父兄といわれる先輩たちが学部先輩のところに来て、要するに合宿所なんですよ。合宿所で「おい池上、こうこうこうで明日経済学部を集まれ」と。「なんすか」と言ったら「赤が来るみたいだぞ」と。じゃあ集まりますと。下の連中はわからないと思います。こうこうこういうわけでこうしたからお前ら闘争を組めとかね、闘えとか。

大場：ちょっと補足しますと、だいたい武道系の人たちが多かった、空手とか少林寺とかそういう人たちが多かったんです。

森：少林寺はそうじゃないな。

大場：実は学内右翼という組織がありまして、要するに右も左もそういう組織を作っちゃいけないというのが古田の方針なんですけど、実はさっき森さんが言ったように、経済の4・20事件を、多分これは僕が調べた限りですけども、4つの学部が絡んでるんです。法学部のいわゆる右派の、執行部を握ってる右派の人たち、それから経済の右派の人たち、これには応援団も体育会も絡んでいる。それから、実際に藤原さんたちをボコボコにやった実行部隊は、農獣医学部の人たちが多いいんです。なんでかという、農獣医学部は1年生から4年生まで三軒茶屋にあった農獣医学部にいるんです。だからほかを知らないんですよ。この人たちを動員してるんです。だから先ほど言った、金髪の女性が「あいつが経済学部の執行部だ、あいつもそうだ」と名指ししてるんです。だから金髪の女性が指示してるというのはわかってるんです。それで、要するに暴力鎮圧部隊の集結地が文理学部だった。そこまでは一応わかってるんですよ。どうも、この戦略戦術を描いて実行した部隊の人たちが、67年の10月、つまり4・20事件の後に、経済学部の7階の大講堂で「日本大学学生会議」というのを結成してるんです。これには来賓として古田重二良と永田〔菊四郎〕総長が出ているんです。初めてだと思いますけどね。これは全学部を、どのくらいの規模なのかわかりません、各学

部に支部があったようです。で、これとは別に、どうもこれは闘争過程で出てきたんですけど、農獣医学部は独自に、農獣医学部の連中を中心にした「日新会」という組織があって、これもそこそこの勢力を持っていたようですけども、どうも学生会議と日新会はちょっと違うようですね。日大の校歌って「日に日に新たに」というので、そこからとってるんですけども。

池上：多分、歴博に入れた資料のなかに、日新会のアジビラが何枚か入ってます。

大場：それで、先ほど言った日大学生会議の諸君は、闘争の初期の頃、非常に活躍していました。6月19日の深夜というか早朝に、文理学部にスト破りが入ってくるんですけど、総勢70名で。やっぱり日本刀持ったりして、これは学生会議の諸君が入ってきた。で、いつ頃から姿を消すのかはわかりませんが、三崎町の神田の公園で授業再開デモなんかの時にも、多分夏過ぎぐらいまでは学生会議の名前でやってたと思います。多分その後はね、解散はしてないと思うんだけど、名称を変えちゃった可能性があるんですよね。授業再開なんとか全学協議会みたいな形で。それはね、単なる粗暴な暴力右派だけじゃなくて、それこそ所謂皇国史観を持った人たちとか。

森：反憲学連なんかに繋がっていくんじゃない？ 梶島〔有三〕の日本会議とか。

大場：いくんじゃないかと思うんだけど、変な話ですけど、この右翼のなかにも自民党系の人もいるんですよね。自民党系の右派系ですね。実際に言うと、全共闘のメンバーには自民党青年部の左派系と言っていいんでしょうか、いるんです。というか、親父さんが地方の議員の大物だったりすると、やっぱりそこに入っちゃうんですよね。地域の有力者、けっこう多いんです。それから警察官の子弟。当時みんな隠してるんです、親父が警察なのを。けっこう多いんです。で、今になって時間が経って、「いやあ、実は俺の親父はなんとか署の署長だった」とかね、そういうことがわかる。実は池上君もそうなんです。その系統の子なんです。だから、本来なら学生運動なんかやるはずもない家庭環境のやつがやっちゃったと。

池上：けっこう多いですね。「千葉の三里塚に行かない」「どうして行かないの」「いや、あその判事うちの親父なんだよ」「兄貴が機動隊の隊長やってるから、千葉では捕まりたくないんだ」とかね。いろんな人が多かったから、やはり何十年も続けてかないんだろうけど、それでもやっぱり反原なんか行くとふっと現れてきて「お前元気だった」って。「何やってんの」。けっこうな重役、ある生命会社の重役までなってるやつが来たり、「お前リスクは高いだろうそれは」って言う。「この期に及んで」とか、よくわからなかった日大闘争が、執行部とは違ってね、大学を見つめてて腹が立って、理不尽さに闘ったというか、要するに何かやってきた人間というのは今でもいっぱいいます。ただ、「もうそこはいいよ出なくて」とか、不思議と出たがらないです。「今更」とか。それでも「何やってるの」と言う、自然な何かの会をやってる。結局何かに関わってる人がいますよね。その辺ですかね不思議なのは。

あともうひとつ、今日なにに闘争をやるから来いと、あるいは中核派とか全学連の諸君だと何かこうやりますよね。経済学部じゃなくて全共闘は「何月何日集会をやるから集まってくださいーい」、そんなもんです。そっからやっとなら、そのビラも先生方は〔研究に〕

ものすごく苦勞すると思います。勝手に書いてるんですよ。私たちも見たんだけどよくわからない、「こいつ何言ってるの」。僕も山本さんのビラをいくつか手伝ったんですよ、データ化するのに。見ててね、眺めてるだけでだいたいわかるんですよ。日大生ってのは日にちをいれない、なんの所属かも書かないやつがいる。多分、全部捨てるようですよ。というくらい個人個人で一生懸命訴えて、それでひとつの全共闘、ひとつの学部で。あとは全学連の諸君と混ざり合ってやっていくという形が日大全共闘ではおおざっぱなイメージとして。全学連の見方だとちょっと。また、市民運動にちょっと似てるんですけどとても過激な連中、暴力集団、という感覚かな？ 全学連とかそういう見方で研究なされると、ちょっとアホの集団になっちゃいますよ僕は。

森：だから、こないだ国会前に行くか、みたいな場面があったじゃないですか。昔の仲間と3人とか4人くらいで行きますとですね、どうしても濃紺のあれが立っていると体が疼くんですね。

池上：右翼を見ると急にグーっときたり。

森：「やめとけお前」というのにこうやってね…相手が若いしまだ経験がないじゃないですか、若いお巡りさんたちがね。だから「なんで俺を押すんだ」みたいなね、立ってるのにこうぶつかっていくみたいなことを、習性でやるんだな。

池上：ここに来るのも緊張してたんですよ。先生と名のつく人が苦手なんです。高校の時も不良だったのでそうなんですけど、大学でもかなりの教授たちは、ひどい先生たちが多くてね。例えば荒川先生が書いたこの本、3,000円で買うんですよ。買うと可なんです。優・良・可・不可で、可だとギリギリ、あとは試験を受けるか先生が気に入るかだ。とにかくギリギリでこの先生の本を買えと。そうすると、先輩から譲り受けると、授業の最初の時に開かされるんですよ。先生がね、何年度のね、あの人多分、今思うと「あんた新しいハンコちゃんと作ってんの」というくらい、名前の下に年度が入ってるんで、それをポンポンと「はい、あなたは一番下の可は大丈夫ね」と全部やってくんですよ。で、何人かが先輩からもらって、まあ偉いですよ、家が大変だからって。そうするとね、「君、単位取れないよ」って言うんですよ。これ、はっきり言うんですよ、そういうふうに、1年生の時に。それを先輩にも聞くとね、「うん、そうだよ」って。

森：ちょっと聞いたことないんだけど…。

池上：僕たちの時はそうでしたよ。

森：そうかもね、あったんだろうな。

池上：そういう感覚で闘争やってても、英語の先生が人民と訳さなきゃいけないのを「これは赤の言葉だから国民にしましょうね」とかね、信じられないことを言う先生方もいるからね、一瞬「えっ」と思うのが日大生じゃないかな、と思うんですけど。

森：優秀な生徒もたくさんいるんですよ。

池上：それは総研とかね、ゼミ連の連中だけで。

森：もちろんみんな勉強するために来てるんだから、大学に。

池上：一般学生はね、一応大学出てサラリーマンに…当時だから親が「大学に行け」と。多分、

中産階級の子が多いですよ。

大場：言うの忘れてましたけども、当時文系で、ほかの法政とか立教、早稲田も含めて、私学は年間の学費が5万円だったと思います。ところが日大は10万だったんです。で、僕は私学で一番高いと思ってたら、僕より2年上の上智の人が、上智の哲学科は12万だったそうです。その人は68年にたまたま運悪く東大に学士入学したら、東大の年間学費が1万2千円だった。だから日大は、普通の私学よりも2倍とってたんです。しかも堂々と66年の年頭に日大新聞で「値上げしました」ということを古田が言ってるんです。だから森さんと私は学費が違うんですよ。ものすごく違う。池上君は私以降なんです。だから多分、使途不明金というのは単に本人だけじゃなくて、両親・保護者たちを含んでるんですよ。だから怒りがあったと思います。あと、今〔章〕君って全共闘執行部の組織部長〔組織局長〕やった彼が何年か前に来て僕らに話したのは、彼は法学部の特待生なんです。ただし付属高校なんです。鶴ヶ丘高校っていったかな。授業が二部制だったって言うんですよ、自分の学年の時に。わかります？ 要するに収容能力いっぱいだったから、プレハブの増設校舎だったんですって。そこで要するに午前と午後の二部制で授業をやってたって言うんですよ。3年間その通りやったかどうかわかりませんがね。そういうことを平気でやる大学だったんですよ。

森：私も初めて知った。

大場：あれ聞いて僕はびっくりしたんですよ。で、森さんもお存じの、ある豊山校のOBに聞いたら、みんな付属だから志望の学部に行けるといいますでしょ。行けないんですって。

森：お金積まなきゃ。

大場：1次・2次・3次補欠まである。で、10万ずつ上積みしなきゃいけない。当時の30万。彼は、自分は3次補欠だって自慢してましたが、親父さんは30万余計に払ってるんじゃないか。けども、本人は自分の成績で入れるかどうかなんてわからないですよ。だって、付属高校がいくつもあるわけですから。さすがにナンバースクールの一・二・三校はさすがにそういうことはやってなかったようですが、そのほかの豊山とか鶴ヶ丘とか櫻丘とか、その辺の付属は全部そういう補欠制度をやってたみたいです。だからけっこう付属出身の人が多いいです、全共闘は。僕は公立から入ってそのことを初めて聞いて、「そうか、もう入る前から3年間痛めつけられてるのか、じゃあお前たちが立ち上がるのはわかるな」。

清宮：ちょっと救援会の方と関連するんですけど、私の所にやはり闘争が始まってから、お父さんお母さんがいっぱい来るわけですよ。私の住所は公表してありますから。で、やはり一番こたえたのは、私に「先生は大学卒業してるんですよ」って言うわけね。卒業しちゃってますからね。「うちの子はここで今やめたら卒業できないんですよ。だから彼らをなんとか卒業させてくれ」、まあ要するに言う人によっては闘争をやめさせてくれというものもあるんですけど、「とにかく何とか今まで苦勞してやってきたので、うちの息子は何とか卒業するようにしてくれ」という話は、これは一番迷いましたね。

池上：その卒業の話なんですけど、各学部全部卒業の仕方が違います。で、73年までで、68年の日大闘争が始まってから73年くらいまでが、ずっと尾を引いてくんですけど、ちゃんと〔掲

示に] 貼られたという面白いんですけど、経済学部で退学になったのはたった1人です。それと、4年生で卒業できなかったのは、おそらく学費さえ払えば全部卒業させられているはずです。3年生もそうだし僕の代までは学費をきちっと払って、僕の場合はとにかく試験を一応受ければ、全部トコロテン式に出されます。ところが、農獣医学部っていうのは闘争始まってからも、退学になって貼り出される人間がいるんですよ。それだけ学部によっても対応が全然違うんだと思います。ですから、多分ここだけの話ではなくて、ほかの学部の人間が来ないと…で、それで初めて秋田や矢崎副議長たちもまぜてじゃないと、ちょっと大変だと思うんですけど。推測と、僕たちは他学部になると推測が…で、たまたま『叛バリ』を書いたし、たまたま情報だから、自分の知らない範囲まで一応頭に入っているということだけなので、きちっとした歴史を出すには、各学部のある程度わかっている人間とも話さないと。ところがもう、人間情けないですね、40年ぐらいで「え、そうだったの」ということが今でもあって話をしてますね。で、僕も情報ノートはただ写しただけなんですけど、何とか残したい、歴博がこれをやっていただくのが前からわかってれば、あんなアホな仕事はしなかったんですけどね。世に何とか残したいなというのが、例の800頁にわたる、ひたすら写して写して、どうやってこの消えていく字を読めるようにしようかなっていうんで、2年ぐらいかかって一人でやってたんですけど。それを見てるとね、各学部みんな違うんだな。この話をするとどこかで少しずつズレがあるんですよ。見つめ直すと「あ、ここなんだな」という焦点がきちっと。アジビラでもそうだしステッカーでもそうなんですけど、特に日大生は全員が「俺がやった」と思ってますので。山本さんのところは楽だだと思います。山本さんがきちっと中心になってうまく振り分けてっているんで、ですから彼は20何巻の本を出すことができたし。

荒川：ビラを誰が書いていたかという話に戻りますけど、そうすると学部毎の全共闘の見解を代表するようなものはどこが書いていますか。あと勝手にもうそれぞれが…。ビラを実際に見ていて、丸字で「書き慣れてないな」というビラがあるんですけど、それはもう個々に勝手に…。

池上：ゲバ文字がかっこいいからって書いたやつもいます。たとえばなんとか闘争委員会、何闘委というのは代表して書いてるし、書いた人もだいたい予想がつくんですよ。

荒川：それは情報局のメンバーが書くのですか、本人たちですか？

池上：個人というか、各闘争委員会の、ここがまた面白い、例えば四闘委・三闘委・二闘委・一闘委というように分かれてくんですよ。

清宮：各学年で。

池上：各学年でまた闘争委員会ができちゃうんですよ。

森：自然にできたんですよ。

大場：法学部と経済は学年別闘争委員会なんですよ。で、芸術とか僕らは、文理は17学科あるんですよ。で、学科別闘争委員会。多分、理工も学科別闘争委員会だと思います。

池上：だから、文闘委＝全学共闘会議文理学部闘争委員会のなかに10いくつの闘争委員会がある。で、文責になんか書かれてる、きちっと経闘委とか、情報ではなんだっけな、情報局でも出

してました。そのぐらいなんで、多分大変だと思います。

荒川：それで、情報局が出す場合は情報局と名乗りますか？それとも極秘で…。

池上：事務局です。実は情報局というのは仲間内の名前なんで、事務局。そうですね、ほとんど事務局できちっと。情報という名前は今になってから頻繁に飛び交ってるんですけど、仲間では「情報の連中」とか言うんです。先ほど言った組織化されてったのは68年で、情報が一番突出してたのかな。

大場：山本さんが確か遊撃隊の最初のルールブック、情報の、あれを引用してたよね。勝手なんですよ名乗り方が。情報なんだけど遊撃隊とか名乗ったり。それから勝手に、バリケードの中で仲良しグループができるんですよね、学部とか学年。それが勝手にまた闘争委員会を、文理なんかは作っちゃうんです。通称SP研なんていうの、文理の、文理っていうか、文理学部に来てる商学部の1年生が作るんです。SPって何かというと、スチューデント・パワーの略。要するに、先輩たち、僕ら上級生からあれこれ命令されるのが嫌だからっていうんで、勝手に籍を残しながら自分たちの仲良しグループを十数人で作っちゃって、その名前でもたじろ出すんですよ。

池上：だから、大量の紙切れをいっぱい送ってしまって申し訳ないとは思ってるんですよ。ただ、僕たちも今更それを見てね、整理をきちっとつけて、これはこうですよっていう自覚もなかったし、まさかという話もあったので、そういうことでね、もうシツチャカメツチャカで、とにかく送ってあとは先生たちや学者さんたちが見て判断して、どれが使えるか。重複もいっぱいあると思うんです。それは各方面からまた送ってるんですよ。

森：ほとんど毎晩ガリ切ってましたからね、そういうのがみんなワッと集まってくるんだから(笑)。

池上：たまたま何十箱まとまったところから送ったやつと、その話を聞いて「俺のところはこれがあるよ」、じゃあ直接清宮さんのところに送ってくれば、清宮さんがちゃんとなんとかするよぐらいで。

大場：自分の裁判記録まで出したやついますもんね。

池上：なかには、多分よくないんだろうけど、全共闘が運動の必要上、大学側から「押収した」ものもありますね。バリケードから。見ているうちにきっと裏付け、要するに裏付けですよ。その時に大学がどういうことをしていたかという裏付けには役に立つかなあぐらいで。

森：だいぶ破棄されちゃったみたいですけど。

池上：情報ノートもね、あの本は本当はあと2冊できるぐらいあるんですよ。それが、バリケードから移り、ガサ入れをやられて、どんどん減っていった残ったのがあれだけだった。あれをずっと見ているうちに何とか残したいっていうんで、最初はタイプ打ちにしようかと思ったんですけど、それだと真実味がないんでね、途中で変えることもできちゃうから、それじゃ丸写しの方がいいだろう、ということであれを。で、あれは山本さんが国立国会図書館でしたっけ、憲政資料室として出したんで、日大もなんか置いとかないと格好つかんかなという話をちょっと仲間内でしてね、じゃあ作った物をこれならなんとか…何十部か刷ったんだ。えらい高いものなんです。あれは原価の値段で計算しちゃってああいいう値段になっ

てるんですけど、それで送った。で、法政の大原社研は受け取ってくれなかった。もういっぱいだよって言われて。

鈴木：何年頃ですか？

池上：えーっとね、今から2年前かな。

鈴木：そういうことは確かにあったかもしれない。

池上：そこにも置いといてくれればと思ったんですけど、もし受け取っていただけるなら。

大場：今でも即。

鈴木：やっぱりあの、スペースがないんですよ。

池上：なんかもうないんだって言われて。

鈴木：教育大闘争の史料があるんだけど、それすら整理されないでそのまんまになっちゃって。結局そうになっちゃうともったいないと思うんですよね。

池上：ただ、本にはしたんでね、目を通して、あれは期日期的な日記帳になるかなと。この日は闘争あったよとか。

大場：個人的に寄贈すれば、きっと置いていただけると思いますよ。

鈴木：いや、研究所の寄贈は集団で決めるので、私の判断でできないんですけど。

池上：けっこうです、持って行った時に「やっぱり日大だめかな」ぐらいの。

鈴木：やっぱり、収集範囲を決めないと大変なことになっちゃうと思ったんじゃないですか。

森：記録というべきかどうか、記録としては経済の経済学部闘争委員会のホームページ上にあるんです。こんな枚数になりますけど、ものすごく膨大な量が入ってます。これは学友の鈴木君が20年～30年ぐらいかけて集めた話を、情報も入ってるけど話が入ってるんですね。まあ平たく言えば、かなり週刊誌っぽくグワーツといっぱいいろんなことが書いてあって、見方によっては非常に面白いんですけど、これはものすごい膨大な量が入ってます。あとはいろいろあるんだけど、経済としての記録というのがないので、今それを作ろうかということで作業を始めたりはしてるんですけど、ないんですよね正式な本が。

池上：日大生なんですきっと。やるの面倒くさいんですよみんな。今回も何人かは「ああよかった、どうしようか、どうしようかとずっと思ってたんです」って、「なんかしなきゃいけない」って。それならちょうどいいから、逆にこのままだとただ腐らせてただけだから、女房にもいつも「片付けろ」だの「邪魔」だの言われてるからよかったと。日大生って多分あまりこだわってないんじゃないかな。心の中ではこだわってるやついるんだけど、これはこれで文書だから俺たちはやったんだ、というこだわり方は非常にごく一部分の人間だけで、全体的には自分がやったんだというそのなかで終わってるんじゃないかな、今もそれを生きているんじゃないかなと思いますね。

荒川：日大資料については、〔歴博に〕大規模な燻蒸室というのがありまして、カビとか劣化が激しかったので、東大資料より優先的に燻蒸しました。いま東大資料の燻蒸に入ったところで、ひと月くらいは見られませんが、とりあえずそういう作業をしています。

荒川：食堂の予約の関係もあるので、一旦ここで切ります。

(昼食休憩)

荒川：いろいろ質問を受けたいのですが、その前に、今食事しながら話をされていて出たことで、補足してもらいたいことが2点ほどあります。1点目は芸術学部の立ち上がりの話が出てないのですが、清宮さんの方で少しご存じだということ、特に岩波映画のメンバーが関係してるということで、大変興味深いので、そのあたりのことを清宮さんを中心にお話をさせていただきませんか。2点目は、闘争資金をどういうふうにして調達していたのかということです。複数の方面からあるのでしょうか、時期によっても違うということですが、そのあたりのルート、集め方を補足していただきたく、そのあたりから再開したいと思いますのでよろしくお願いします。

清宮：じゃあ、時間もあれなので、救援会も含めておおざっぱにお話しします。まず一番最初は、救援会を作ろうというのは、いわゆる日大闘争の始まる前から、日大生が学内じゃなくて外の闘争で逮捕された時に、それを救援、下着を送ったりとかそういうのを始めて、各セクトに属している人はすぐできるんですよ。しかし日大生の場合はそういう組織がないので、パクられたらそのままなんですよ。次の日まで濡れたままにいるという状態なんで、それをどうしようかというのから一番最初に始まったものなんです。ですから、そういうのは、60年を経ていろいろ経過がありまして、非常に極端な言い方をしますと、私はその頃は地方の塾の先生をしていまして、住まいは、江戸川区の平井というところでした。平井の病院の、内科・外科・歯科といった各科の先生方とは非常に親しくしていまして、私たちのしていることを理解してくれていました。そこで、日大生が三里塚かどこかにいて怪我したとか、学生たちを病院で受診させる時は、私の方からその先生方に紹介をして、助けてもらいました。そういう付き合いがあって。そんなことがありまして、日大闘争が始まってから、もうご存じのように逮捕者の数が違うものですから、各セクトは全部みんな応援してもらえんですけど、日大生でもセクトに関係している人はそれで大丈夫なんですけど、そうじゃないのがゼロの数が違うもんですから、それをまず弁護団を作らなきゃいけない。日大闘争弁護団を若い田賀さんという人を中心に作って、日大生がどこにいるかを全部探し当てて、それにいろんな差し入れをする。それから、出る時もお金がかかったりしますんで、それをどうするか。それでやはり最終的には保釈金の問題が、単位が違うものですから、それはですね、具体的に名前を挙げるのはあるんですが、外に出さないということで、例えば現金を、たくさんのお金を3桁ぐらい出してくれる人もいました。それから、お金は出せないけど物をというのもありましたし、毎月私のところに何万円かをずっと送ってくる人もいました。例えば大江健三郎さんの場合、署名をしたりとかもしない、現金を渡すのもしない、しかし「この絵を持って行ってくれ」というんで、大江さんから絵を貰いまして、その絵で何百万というお金を我々が貰うという、そういうこともありました。もちろん、大江さんの名前は当然出しませんし。あとは、コンスタントにお金を毎月丁寧に送ってきたのは寂聴さんです。ありがたいことに、瀬戸内寂聴さんからは毎月お金をいただきましたので、寂聴さんは名前を出すなどとは言わなかったんですけど、そういうのはあ

りましたし、そのほかは、とにかくあの、かなりのリストを私たち持ってまして、その人たちに全部お願いしますということで、保釈金はどのくらい、秋田はどのくらいとかそういうのを含めてお願いしました。ですから、親が出した人ももちろんいますけど、所謂闘争委員会の、要するに秋田とかそういうところは、みんな我々が、要するに単位が違うから、さっき池上は1万円出してくれたそうなんですけど、カンパの額が違うので。

なぜそういうことができたかという、まず闘争が始まる前に「数学科事件」というのがございまして、現実には動き出したのは1964年なんですけど、実際に文理学部数学科の教授たちが全部、「日大の思想に合わないから辞めてくれ」という、それだけなんです。それが62年の10月に申し渡されて、その後実際に4月にガイダンスがありますから、教授がいなくなるわけですね。そうするとガイダンスの時に取りたいのが全部取れないというのがあって、63年の4月ぐらいからガイダンスで明らかになって、実際に動き出してはつきりしたのが64年からなんですけど、そのなかで、結論から言うと、数学科が成り立たなくなるくらい教授陣が全部クビになりますので、それに今度は学生ももちろん活動してるのが処分されますから、それに対してどうするかというので、彼らの前じゃ恥ずかしくてあれなんですけど、日大当局と闘って処分撤回闘争をしても無理だ、やれば教授も処分されるし学生も処分される。じゃあどうするかということで、私たちとしては数学者として生き残るためにどうしようか、そういう運動をしようと。ですから、数学者の運動で、いわゆる数学会に所属する人たちに、2,000名くらいいるうち1,500名の署名をもらいまして、日大には数学者は一切協力しないという署名運動をして、それでやるんですね。ですから、その過程で数学者が日大に対して反対をするという、そういう運動をやったために、全国的にも各大学を回りました。なぜかといえば、東京学生会館という600人の学生がいる寮がありまして、今九段にあるわけなんですけど、そこで私は自治会の委員長をやったので、よその大学に、東北大から熊本大学まで行く用事がありました。その過程で各大学に私が回って、数学者のこういう事件があるのでご協力をお願いしたい、それについては、ということになって、最終的には学術会議の宗像誠也さんが委員長をやっていた「学問思想の自由委員会」まで問題として上げましたけど、「日大はひどいところだね」というところで終わってしまいました。しかし、そういう運動のベースがあったので、カンパをお願いすることができたんですね。ですから、そうじゃないと多分彼らにもっと迷惑をかけたんじゃないかと思うんですけど、なにしろ量がいっぱいなのと、それでお金の額が多いので、単位を、もちろんいくら以上とかそんなことは言いませんけど、1万円の人10人よりもたくさん出してくれる人を探さなくちゃいけないんで、そういうことで実際彼らを支えたところがあるわけです。ですから、実態はそれです。カンパは彼らが街頭でやったりしまして、我々が日大闘争のカンパを街頭でやることは一切ありません。そういう関係者で全部やれたんです。

ただ、日大闘争の救援会というのは、そういう形で母体になってるんですけど、たまたま68年からの場合は、芸術学部とそれから法政大学の経済だと思ってるんですけど、救援する人たちがいて、法政大学の場合は日大から法政の大学院に行ってる人とか、そういう

人たちがいたので、そういう関係で太い線ではなく細々と、日大闘争を救援しようというのがあって、芸術学部の場合は、やはり芸術関係の集団ですから、やはりそういう歴史的な写真とか映像とか、そういうのに関心があったんじゃないかと思うんですが、映画の人たちが中心でした。その人たちが、もちろん日大と関係ないですよ。映画やなんか、具体的に多かったのは岩波映画の人たちです。名前を挙げても大丈夫だと思うんですが、山際永三という人と岡田〔道仁〕さんという人と、その人たちが映画のグループの中心にいて、芸術学部の学生が逮捕されるから、じゃあなんとか芸術学部の学生を面倒見ようということで、芸術学部ですね。法政の経済の人は、経済を何とかしようというのがありまして、それだけじゃだめなので、医療からお金から、著名人に何かお願いするのか、それは私どもが持っていましたので、私が代表でもあったから、日大闘争救援会という名前にして、それでお金を送ってもらう都合があるので、清宮の名前だけは、住所も本名でやらないとだめなんで、それで私の名前を公表したんですね。だから当然右翼やなんかがいろいろうちへきて、うちの家内は大変だったと思いますけど、その代わり周りのお医者さんたちには、嫌な顔をされながら今でもお付き合いを持ったりとか、そういうことがあるものですから。非常におおざっぱな話ですが、前史があってコネがあって、その関係で数学者と大学の関係者に支えられて、救援会の活動ができた、そういうことでございます。

谷合：救済の話ですけど、弁護士事務所はどこに頼むか決まっていたか？

清宮：弁護士さんを探すことから始めて、田賀さんという人が京大の人ですけど、その田賀さんをつかまえて。後藤昌次郎さんとか有名な方がいらっしゃって、後藤昌次郎さんはほかのセクトやなんかの弁護士もやってたので、年齢も年齢だったので、誰か若くてやれる人、1,000人以上の逮捕者が出てるわけですから、それをどうするかというので、それで田賀さんのグループの何人かの人たちが一緒になってもらって、それでお願いしたわけで、ですからまったく決まなくてあとは救援会の事務所は、お金を集めたりするのは私の実際の住所ですが、実際の事務所になるのは、新宿の南口に借りてまして、それも日大の救援会と名乗ると襲われたりするあれもあるので、映画のプロダクションの人がいたので、「プロダクション」と貼って、日大のNでNプロって、救援会の、隠してるわけじゃないけど公にできなかった段階です。日大闘争救援会の方は私の住所です。

森：弁護団は田賀先生を中心に7名の弁護士で弁護団を作りまして、田賀先生がもう亡くなられましたけど、3年前か。『1608名の逮捕者』[大光社、1970年]という本を書いてまして、これに、ほとんど最初から関わってますので、逮捕者が1,608名だけど、これはわかっているだけで、実は私その前に捕まっていた、これ入ってないな、もっといると思うんだけど、それはさっきおっしゃったように何の支援もなくいたんですけど、1,608名の逮捕者で、負傷者が6,000名、重傷者五百数十名、そのうち失明2名、半身不随者が6名、それにプラスして死者がわかっているだけで2名、機動隊の方と文理の中村〔克己〕君と2人死者が。ほかにもいるはずだろうけどわからない、ということですね。すごい逮捕者。で、田賀先生の本には、警察・検察・裁判所の廷吏まで変わっていく姿、弁護人に発言禁止とか退廷とか変わって行っちゃう、そういう状況が克明に書かれています。あとは機動隊の西条〔秀雄〕巡

査〔部長〕が亡くなってますので…まだそこまで行ってないんだ。それはその後の裁判闘争になりますのでね、本書いた後ですけど。

池上：救援はその後ですね、確か。

荒川：救援カンパ以外の部分の闘争資金をどうやって確保していたのか、わかる範囲で。

森：わからないですね、私は執行部に入っていないので。

池上：執行部で、名前は言わない、亡くなったんですけど、ずっと昔からお金のことを聞いてたんですけど、学生会費、ゼミとか、ひとつがそれが何百万なんですよ、日大って。

森：1,000万ぐらいあったと思うなあ。

大場：文理は超えてました。

池上：1,000万近いお金を、本当は各ゼミとかに配るお金があったんです。それは初年度の、68年の4月に闘争が起きてしまったので、そのお金はいただきました、という話です。で、ちゃんと使いましたと。というのは、私利私欲じゃなくて、ヘルメット代とか材木代とかなんかって。どっかにあったような気が。

大場：多分あの時の学生会費は1人頭1,500円ぐらいだったと思います。

森：学校が徴収しましたからね。

大場：ただ、全体の学生数は学校側しか知らないんで。それで、僕が計算したところによると、67年までは一応通常だったんで、その時の春の予算で文理学部は1万何千人いたんで、約2,000万弱でした、学生会費。ですから、恐らく68年も同じぐらい集めたと思います。

道場：代理徴収した後すぐ自治会の方へ？

大場：来ません。

道場：今、1,000万円くらいあって…。

大場：春に学生会の予算を組みますよね。これは体育会と文化サークルと執行部にばらけるんですけど、その総額を新聞では発表するんです。だから要するに、多分1,500円×学生総数という、学生総数何人いるかってわかってないけど、それで割って総額は出ます。それから、春の学生総会というのは予算の分捕り合戦ですから、けっこう体育会系の人たちも真剣なんですよ。だから総会だけは流会したことはないんですけども、僕が記憶するのは、文理学部は学生数が1万何千人で学生会の年間総額が2,000万円弱だったと思います。

森：経済は1,000万円…。

大場：それを学部別団交の時に文理学部闘争委員会は、これは直接、多胡〔史郎〕君という会計の責任者に聞いたら、前後2回にわたって総計600万を引き出した。で、2,000万のうち600万だからけっこう割を食ったように思ったんですけど。

池上：ピンハネされてるよね。

大場：まあね。と言ってもそれは、学文連というサークル組織を握ってたという名目を出してるんですよ。だから体育会の各運動部にも大学は出さざるを得ないでしょうから、そっちに回したと。多分、経済はその学生会費とか何かを集めたんだろうと思うんです。今ちょっと見たら、農獣医と理工（一部・二部）と経済と郡山工学部と歯学部、医学部、津田沼の生産工学部は、一応学生自治会をベースにして闘争委員会を立ち上げてるんです。だから多

分、学生会費を一部ないしは全額使えたのではないかと。学生会執行部を取っていなかったのは商学部と芸術学部、法学部なんです。

森：正式な執行部だったからね、秋田執行部は。

大場：法学部も確か闘争のなかで、法学部闘争委員会が主催して学生委員会を開き、現執行部を解散させています。法闘委はかなり強かったんで、一部まとまった金を学部団交で下ろしたとは聞いてます。いくら下ろしたかわかりません。

道場：だから、大学側が口座を凍結して使えないようにするとか、そういうことは…。

大場：できないはずですよあれ、代理徴収だから。

森：経済は秋田執行部の時は、実はしょっぱなそれやられたんですよ。

大場：あれ法律違反なんですよ。

森：ところが、さんざん抗議をして出してもらってるはずですけどね。止められたんです。

大場：ここは内緒なんですけども、私の哲学科の時の若手教授で瀬在〔良男〕さん、もう亡くなったんですけど、何代か前の総長をやった、実は瀬在さんは決して僕らのシンパじゃないんですけども、いろいろお世話になったりしてたんで、同窓会をやったんですよ。そしたらこそつと言ってたのは、実は一番困ったのはその代理徴収した〔学生会費の〕使い道だったっていうんですよ。つまり、68年はなんとか僕らが引き出した。ところが、69年以降も集めてるわけですよ。

池上：69年は貰ってないんです。

大場：69年以降は自治会組織がなんにも無いんです。だから、学園祭しか下ろしてないんです。実は相当集まったんだけど、これは大学の一存では使える金ではないので、それをどう処理するのか大変困ったというふうにポロっと漏らしたそうです。

池上：どこに行ったかまたわからないんです。

大場：校舎の修繕とかにみんな転用したんだよ。だからこっちが損害賠償〔請求〕受けてないんだよ。

池上：経済学部の69年、70年、損害賠償がないんだな。

大場：そうそう。

池上：71年までは、ゼミ連も総研も70年までなかったんです。

森：というか、私の代でおしまいになってるから。

池上：なくなっちゃったんですよ。勝手にあとはね、多分総研の看板が残ってたり、社研の看板…僕は一応社研なんですよ。笑うでしょ。でも何もない、先輩も…。

森：社研は、だからあなたのような、なかなかこの、素晴らしい仲間がいたんですよ。

池上：僕は「社会科学研究会」って看板かけかえたぐらい、部費は出なかったです。ゼミの金も入らない。空白の4年間くらいになるんじゃないかな。72年に確か、三崎祭をやるんです。やっ和三崎祭をまたやるんですよ。その時にね、膨大な金が出たんです。その金の出し方が日大らしいんです。とにかくサークルの名前ちゃんと書いて、本人と住所と責任者を出せば、最低10万から出すっていうんですよ。

大場：当時の10万か、すごいな。

池上：私は「社研」の名前と、ほかに「社会見学研究会」(笑)、部員を4人作って、〔私が〕部長

になって、とにかく闘争やるんでね、やってはいけないことなんだろうけど、20万ぐらい引っぱり出しました。そこで領収書の闘いが始まるんですよ。で、領収書を渡さない、その時の三崎祭執行部は。要するに、大学は、税務署があるんでね、その領収書が欲しいって言ったから、「コピーをあげるよ」と、「三崎祭のコピーを全部あげる」と、「税務署が来た時に本物のやつを見せてあげるよ」。だから大学がすごく怒りましてね、また叩き出されました。よっぽど悪いことしてるんでしょう。と思いますよ。要するに、領収書の写しがないのがいけないのは、国税局に聞かないのはわかってるんだけど、その時にこっちの執行部がもう一度持って行って見せるから、とりあえず事務手続きはできるでしょ、という話で、2ヶ月か3ヶ月は団交やりました。最後は例によって関東軍がもっとスマートになって、なんとか警備会社〔特別防衛保障株式会社〕という諸君たちになりまして。彼らはものすごく学習しましてね、学生の前では1回も僕殴られたことはありません。隊列をこっちで組んでくと向こうも隊列をきちっと組んで、ぶつかるんですよ。ぶつかって押されてくんですよ。で、68年当時のようにワートと来て、学生服を着たやつとか右翼みたいなのが来てボコボコボコってことは一切〔なかった〕。で、追い詰められて、地下のなくなったところでやられるんですよ、蹴られたりして。だから普通の学生さんの前ではね、ほぼやられたことはなかったです。で、ロックアウト、また学生証〔検査〕と、これが73年74年くらいまで、80年近くまでか、続きました、数少ない全共闘の中で。で、1人で入るとやられる。「ちょっと話聞かせてよ」つって、ガードマン室があると、その部屋の中へ連れ込まれると20人ぐらい屈強な、もうその時は組織化されたなになにに警備会社って、もちろんOBたちが作った関東軍の流れですよ。要するにガードマンという形でやられました。そこで68年の闘争は、先輩たちの前で申し訳ないんだけど、その辺で多分1回消えてっちゃうんですよ、日大闘争は。

森：68年の時はカンパがすごかったんですよ。もう、よく新宿から錦糸町、池袋、渋谷と街頭に立ちましたけど、もうとにかく手を握って「がんばってね」って千円札をいっぱい頂いたとかですね、今でも語りぐさになってるのは、リュックサックにそういうのを全部詰め込んで、ある銀行にリュックサック2つだか3つだかをもち込んだら、銀行員が絶句しちゃって「これどう集計するの」みたいな、当時の何百万か知りませんが、そういう単位でお金が、68年は集まったはずですよ。それがどう使われのか、一説には財務部長が銀座で呑んでたらしいぞ、みたいな。

池上：それはないと思いますよ。

森：それはまあ冗談ですけどね、そのくらいお金が。

池上：経理はきちっとしてないね、よく考えてみると。

大場：文理はきちっとしてるよ。

森：経済はやってないな。

池上：見ないね。

大場：さっき大江さんの話が出ましたが、僕が知ってるのは、当時の京大の井上清教授、それから立命館をお辞めになった奈良本〔辰也〕先生から相当いただいたという。奈良本さんが

立命をお辞めになって、いろんな雑誌に書き散らかして、四方山話を書きましたよね。簡単に言うと大衆向けの歴史書。あれは我々の闘争資金を捻出するために稼いだんじゃないかなと思ってるぐらい。そのお二方の名前は当時から聞いてました。それから、未確認ですけど五木寛之氏が出したという説もあります。だから、多分あの時の文化人の方って、だいたいみんな一応自主講座なんかでお招きするんですけども、一応受け取ってはいいただけるんです、わずかな謝礼を。ただ、それがすぐカンパになる。だから、要するに使わせないという雰囲気だったみたいです。

池上：あと、箱の中に、半分冗談だったんですけど出納帳なんかありますよ。送った中に見ました出納帳はどこの学部だか知らないけど、ちゃんと〔領収書を〕ペタッと貼っていくくらいくられて。多分それ、全共闘のものだと思うんですけど。

大場：多分、井上清先生なんかの時は、^{ほうがちょう}奉加帳回したんじゃないかな。相当ふんだくったって聞いてます。

池上：あと、最後はアルバイトです。69年の終わりはもうアルバイトで凌いでました。

森：当時資金なくなっちゃったからな。

池上：闘争資金はない、学校は学部単位でゼミにいけない、カンパもだんだんくれない。で、党派の人たちはどんどん街頭闘争に行って、大学に残った連中は大学に入っていくとどこかに連れ込まれてボコッとやられたりすることもあったんでね、あとはアルバイトで凌いだのと、救援会の方のNプロにお世話になったり、あの時は最後は食べさせてもらったような感覚になっちゃいましたよね。「昼飯食べさせて下さい」とかね。

谷合：材木屋が角材をカンパしたっていうのは、日大でした？

森：どうだったっけな。経済にはそういう話があったんだけど…。

大場：買ったという説はありますね。買いに行った。

森：もちろん買いに行ったのは買いに行ってます。近くに材木屋さんがあったんです。本当は夜、ついつい必要なもんですから、夜中に行って…なんていう気持ちもあったんだけど、ちゃんと金払って買ったのと、その時何かカンパしてもらったような話もあったような気がしますけど、どうも定かじゃない。わりと近くに…で、三崎町というか神保町の商店街の人たちは非常に好意的でね、食堂をやったらば段ボール箱に入った卵1箱とかね、野菜持ってきたとか、飯食いに行けばタダ、「食べていきなさい」みたいに。お茶飲みに行ったらコーヒ一代タダとかね。本当に好意的に、地元の人たちが支援してくれましたですね。

大場：文理学部の場合は、確かストライキに入って1週間目ぐらいに貸し布団屋さんが来て、要するに返してもらってもクリーニングして使い物にならないから買い取ってくれって言われて、確か大枚の金額で買い取ったはずですよ。でも、そのことが逆によくって、なんでよかったかという文闘委の資産になるわけですよ。で、69年の2月にバリケードが機動隊導入でつぶされた時に、ものすごく嫌がらせをするんですよ、学部当局が。田村正敏宛に損害賠償請求するって。

森：そんなことあったんだ。

大場：あったんです。そしたら田村が怒って、それなら文闘委の資産を弁償しろってやり返したん

です。それ以降何も言ってこなかったんですけどね。だから、その汚れて使い物にならなかったのを一応キャッシュで買い取って、資産と称したのはよかったと。そういう馬鹿な話がありますけど。

森：そんなことをしてたのか。

池上：経済でも払ってるんです。後で問題になってないはずですよ。

大場：僕は乗ったことないけど、中古車2台を買ってたような気がします。誰の名義で買ったのか、確かあれ文闘委の予算で買ったって言ってたよな…ただ、1台は高速の上でエンストして、そのまま放置して逃げたって。もう1台はどうしたのかわかりませんけども。

荒川：この辺で、参加者からの質問を自由にしてもよろしいですか。20分から30分くらい。

道場：ピンポイントの質問なんですけど、さっき森さんがお話しされた中で、金髪の女性が出てきて「あれとこれとこれが自治会だ」と指差したという話があって、非常に印象的だったんですけど、その人は日頃キャンパス内で見かける人物だったのか、なかったのかということと、さっき大場さんが「赤いシャツ着てるだけでタバコ投げられた」とおっしゃられたんですけど、金髪のネエチャンが来たら「お前何なんだ、この軟弱な」というふうになるところを、むしろ当局側の人物として出てきてるという不思議な場違いさが気になってしょうがないもんですから、どういう人物だったかというのは、何かありますでしょうか？

森：正直言いますとわからない。他学部…。

大場：いや違うんです、経短学生会の女子部ってありましたでしょ。

森：わかんない、みんな首かしげてる。

大場：女子部の役員です。実名もわかってます。割り出しました。

森：その時にわからなくて、ワッと「ビラを」まいたのは見てはいるんですけど、後でその時の調べた記録があるので、その時に私が「あれは誰だ」って聞いているのがちょうど載っているんで、私はわからなかった。

清宮：職員なのか。

大場：女子大生です。経済の経短学生会のなかに女子部ってありましたでしょ。女子部の役員をやってたんです。名前もわかってます。割り出しました。

森：で、要するに、応援団にしても経済のやつらが「あれは誰だ、これは誰だ」とかね、さっきの女性もそうなんだけど、こう選んでですね、「あいつは執行部の誰それ」というと、他学部の、ほとんど農獣医かもしれないですけど、バッジを外した応援団の連中が集中して殴る。だから経済の連中が指名して、バッジを外した他学部の連中が集中的にやると、こういうパターンだったですね。

大場：当時金髪って珍しいですよ。

森：珍しいですね。

大場：だから、今の金髪がどうかかわからないんですよ。赤っぽいかもしれない。

池上：でも、短大の授業を受けたことないですよ。

大場：確かレインコートみたいなのを着てたので目立って言ってた。

池上：経済学部は短大があって、当時入った200人ぐらいいかない1年生は、2年生の授業の一

般教養と、それから短大で受けてたんですよ。

森：わからないんだよなあ。

池上：短大は、最初に入った時にあまりに女の子が多いのでね、ミニスカートのお姉さんや、要するにその辺のチャラチャラした短大生の子ですよ。女の子ばかりなんで僕びっくりしたんですよ。なんで経済学部ってこんな…ところがクラスに帰ると3人しかいませんでした、経済。僕のクラスでは女の子が3人しかいなかった。ところが授業になると短大の一般教養的に、2年間短大と一緒に授業受けてたんですよ。だから1年生は最初は、経済学部の1年生は短大闘争委員会に入れられてた。橋本君たちはみんなそうなんですよ、短闘委って。一闘委ってのはいないんですよ、二闘委はいても。

森：なにせ自主的に、みんなとりあえず作ってくるから全然わからないんですよ。勝手連みたいなもので。

池上：呼んでいただいて申し訳ないんですけどね、みんなバラバラっちゃおかしいけど、得意な分野でなんか一生懸命やったから、ということはあるですね。

安田：「終わり方」という話をちょっと伺いたいんですが、先ほどの話で73年というふうにおっしゃられたり、あるいは80年くらいまではなんとか繋がってたんじゃないかというふうにおっしゃられましたけど、多分先ほどのお話では、執行部の方々の意識と、一般の学生さんの意識が、ある意味で質が違うと思うんだけど、その辺の変化していくプロセスですかね、例えば当時秩序側で言えば正常化プロセスなんだけれども、授業が当然始まりますよね。それは何年ぐらいなんですか。そのあたりからちょっと。

池上：経済学部は1969年の最初の4月から。

森：授業が始まった？

池上：授業が始まりました、一応。バリケードが撤去されて。

大場：いやいや、森さんたちの暮れからですよ。68年、疎開授業。

森：俺行ってないからわからないんだ。

池上：1968年の冬、卒業学年に疎開授業っていうのをやったんですよ。疎開授業に行かなくても卒業できたのは不思議なんですけど。疎開授業って言って経済学部は菅平です。昔の合宿所や保養所、保養所っていうとおかしいですけど、学校の持ってる夏季なんか、冬季なんとかの所を使って、経済学部は卒業単位のために疎開授業ってのを、これが最初の、多分授業って呼ばれる名の、それが授業じゃないかな。これを上野駅でバスを何台も…最初は自由に来いって言ったんですけど、全共闘が来てつぶしちゃったんですよ、先回りして。その次はバスで行きますよって言って、上野で全共闘と学校側がぶつかるんですよ。その時はバラバラにぶつかってくんですよ。やっぱり全共闘の最前でも卒業したいっていうのは、当時は数少ない大学生ですから。で、疎開授業に行って、この疎開授業がひどいところだったんで、ここで今度は一般学生が怒ってつぶしちゃうんですよ。こんなクソ寒い、環境の悪いところで何をやってくんだったって、みんな帰っちゃうんですよ、どんどんどんどん。で、一応疎開授業をやりましたということで、経済学部は卒業式を迎えるわけです。で、他学部がね、僕はちょっと、その辺は…文理なんかどうしやったのかと思うんだけど。

大場：同じですよ。

池上：そうだね、確か全学部ね、特に東京にある学部は全部疎開授業という名前、間違いなく疎開授業と言われました。

大場：文理学部は確か千葉県の成東でやってたんじゃないか。僕は行ってないんですけど。

池上：多分ね、最初のカリキュラムでも1週間しかないんですよ、まっとうにやっても。で、それが昔ですからね、こういう会議室はきちっとしてないし、寒いし。みんな怒って帰っちゃうんですよ。で、全共闘は来るわ、残ったのは体育会系というか学校から雇われた連中で、何にもなんないから、両方ともやらないで帰っちゃうんですよ最後。観客がいらないのにやってもしょうがないですからね、全共闘は怪我するの嫌だし、向こうだって全共闘が怖いから、その頃は。それで、疎開授業ってのは多分先生がおっしゃる「授業の最初」、正式の授業は、経済学部は1969年の4月の通常授業から始まるんですけど、5月の連休まではまともに授業ができませんでした。潜り込んできた学生、全共闘の人たちが、要するに討論会を始めちゃうんですよ。68年は授業一切無し。

荒川：69年の春から正式授業ですね。

池上：春からです。それも5月が終わるまでは、討論会という形でどんどん…授業らしい授業はやらないんですけど、検問をやるんですよ。学生証を見せないと自分の大学の自分の学部に、なぜ自分のIDを見せなければいけないのかってぐらいで、そこでチェックが入っちゃうんですよ。ピックアップされた先輩たちというか、3年生と2年生は残ってますので、みんなガードマンに入れてもらえないんですよ。僕たちみたいに顔が売れてない1年生は、用事があればしょうがないから、学生証をちらっと出して。私は右翼がいる時はまずいので、ほかの1年生が潜り込んでいくわけなんです。で、やっと夏ぐらいから少し軌道に乗ってきて、それからはもう授業。でも検問はずっと続いてました。文理学部も検問は続いていました。で、学校が楽ししたのは、経済学部は2か所しか通用門がないんですよ。ビルの入口ですから、今日のこちらの裏から最初入りましたよね、あれが三崎町の白山通り側、それから反対側の大きな所もシャッターを下ろして、シャッターから通用門を作って入るから、全共闘の部隊は一气には入れないんですよ。そういう形で…。文理学部は周りを全部フェンスを建てて、工事用のフェンスですよ。

大場：鉄条網ね。

池上：鉄条網を入れて、やっぱり通用門のところはトンネルみたいに足場みたいのを組んで、やっぱり学校側が全部チェックして。ただそこは、文理学部は人数が多いので、さすがに4つぐらいの通用門を作って、残りの裏門2つを作って、授業をやってた。ですから69年の春からですね、一応大学の中で授業を始めたっていうのは。

大場：ただし、68年入学組だけですよ。つまり、69年に新入で入ってきた人たちは、また別のところに隔離されるんですね、彼らだけ。文理学部の場合、府中に行きました。経済も…。

池上：藤沢と府中。藤沢が多かったね。

大場：法学部が大宮。

池上：大宮校舎。大宮校舎って大宮の跡地。〔2009年4月に法学部大宮校舎を廃止〕

大場：69年の新入生たちは全部隔離されてるんです。68年までは闘争を経験している。分断作戦に出てるんです。

池上：まあ、授業の再開っていうのは、普通の学生がそっち。入学者は、今でも覚えてるんですけど、『日大アウシュヴィッツ』[稲垣真美著、三一書房、1969年]って本になったぐらいなんですけど、本当に僕ビラ配りに行ってね、つい笑っちゃったんですよ。フェンスがあって鉄条網がずっとあって、その中に2階建てかなんかの、本当のバッテンが入った安いプレハブ校舎でやるんですよ。それで、新入生たちが、僕たちが中に入れないから外でガタガタビラ配り始めると、みんなでワッと手を叩いて、それがあまりにもね、留置所っていうか収容所みたい。

森：収容所だよな。

大場：強制収容所。

池上：僕は2回くらい行って呆れかえっちゃって、よくあいつらこんな学校入ってきたなって。というのが授業の再開の分かれ目です。もう先輩いなかったですよ。

森：すいません（笑）。

池上：で、多分ね、大学生は暴走族と同じじゃないかと僕は思うんですけど、4年生が終わるといなくなっちゃう。何人かはわざと落第して残るんですけど。僕は71年の最後で終わるはずなのに、僕はたまたまわざと落第したんで、74年の春まで残ったんです。で、ずっと見てたんですけど、多分そこで1回かなり小さくなってしまふのかな。救援会の方々も解散ですか、解散ということはないけども。

清宮：解散はしてない。闘争は続いているからね。

池上：闘争のなかでやはりお会いできなくなり始めて、最後Nプロダクションは73年初頭でしたっけ。で、あとはまあ日大全共闘と名乗る者がだんだんなくなってって、というのが。69年からは、多分各学部そうなんですけど、69年の夏からはほとんど全学連の諸君は見なくなりました。70年の春までは大学にビラ配りに来ても、日大のなかでの闘争ってのはどんどん少なくなります。69年は追い出されたんで、明大とか中大のなかに日大が何千人と集まるんです。それで今度は明治や中大に火が付いてっていうか、機動隊が逆に、うんとかわいそうなことは、日大をつかまえるために明大に機動隊が突入してしまう。そうすると、「明大の自治はどうしたんだ」と。私たちが逃げ込むから、明治の学生が逃げてこいって言って、教室に入れてくれるんですよ。で、授業中教室に座ってるところ、機動隊はわからないから、明治の学生を連れてっちゃうんですよ。で、やってる連中はもう自分たちが危ないのわかってるから、うまく逃げ回るんです。そういうことを69年は繰り返して、だんだん消耗して行って、70年はいよいよ大学に戻るんですよねみんなが。各学部で闘争をしながらやってくと。ゼミ連もない、執行部もない。大学が一時全部なくしてしまいましたので。で、74年以降僕も自分の経済学部がどうなったか、怖いっていうか、もう入らないし、今更っていう、40数年経ってるんで…じゃあ日大闘争はいつ終わったか。終わってないんです。はい。これはね、全員が言うんです、「終わってない」。じゃあ負けたか、「負けてない」。では勝ったか、そうするとみんな「うーん」。多分、今でもいろんなことをやって生き

ている人が多いと思います。

友澤：例えば、さっき三里塚という言葉が出ましたが、別の所へ運動の場所を変えていった方なんか、お付き合いの中でいらっしゃいますか？

大場：います。

池上：多分、僕の年代が一番激しくくるんですね、先輩たちがいなくなっって。三里塚はだいぶ行きました。僕は4回だけ警護で行きました。〔僕は〕情報〔事務局〕なんで、戸村〔一作〕委員長が日大で講演会をやる時は、夜行って車で彼を警護っていう形で行ったことはありますけど、そのほかで私は行ってないんですけど、学部学部ではやはり行ってます。そのなかでノンセクトの連中が、多分ヘルメットの色を変えと思うんですよ。経済のライトブルーは狙われるんで、赤いヘルメットに変えてるはずで。で、党派で行ってる人もいるしノンセクトで行ってる人もいます。で、学園闘争って言えば、大学内闘争外の「国際反戦デー」とかいろいろありますよね、そういうのは日大全共闘としての参加は一切してないはずで。各自好きなように。好きなように言っても何十人ですけど。

大場：いや、69年の4・28〔沖縄デー〕は違うよ。

池上：いや、あの時はライトブルーは出さなかったです。

大場：あれは組織決定だから、あれはやってる。68年の10・21〔国際反戦デー〕は個人参加だった。

池上：69年の10・21も個人参加。

森：個人参加のはずなんだけど、行ったら日大の部隊がいるっていう、わけのわからないことがあった（笑）。

池上：そうそう、集まり始めて日大の部隊になったら、「いや実は」ってヘルメットに駆け寄ってうれしそうにかぶったっていうのは。それを情報の方から「いたよ」って。

森：あっちゃこっちゃんに起こったわけです。

池上：そういう人たちは捕まったことが困るんですよ、最初の連絡がなかなか来なくて。そういう形。ですから、一応僕たちは、変な話ですけど政治闘争と大学の自分たちの闘争ってのは、ある意味で変だろうと思われるんですけど、けっこう分けてます。

森：絶対政治的なテーマは出さないと。

池上：だから自由参加。でも、それなりに後付けなんですけど、マルクスを勉強したり、私は経済学部ですから近代経済学なんですけど、マルクスをもう一度勉強してみたり、党派の勉強をこっちもしてみたりっていうのは、やり込められちゃうんでね。ただゲバ棒でひっぱただけなら楽だったんですけど。そういうことはありましたけど。ですから、最後って言ったら今いる学生たちに申し訳ないですけど、70年以降は勉強会、「連合体」って、ノンセクトが作ってくれたやつがあるんですけど、そのぐらいですね。あとは、三里塚に行った人が三里塚の話をしたり、部落研の連中が部落の問題を話したり、差別研は差別、短大でいましたけどウーマンリブの連中は自分たちで提起して、みんながその学習会をするっていう形で。

安田：じゃあいわゆる自主講座みたいなのはあんまりされてなかった？

森：バリケードの中ではやりました。ただバリは9月4日以降はもう落ち着かなくなったんで、

8月末ぐらいまでですかね。経済の場合はね。

池上：僕は知らなかったんですけど、歴博に提出したやつに三島の資料が入ってるんですよ。それはかなり自主講座をやって、面白いんですね、ちゃんと卒業しようと思ってたみたいですよ。ただその、自主講座をちゃんと受けて。たとえば池上教授を呼んで、単位なしで、と。

大場：三島だから、東京の場合だと武藤一羊さんとか吉本隆明氏を呼んできますよね。彼らも来るんです。三島だから泊まりがけで行かなきゃいけない。だからそういうロケーションのためだと思うんですけど、通常習ってた先生のうちに、非常に良心的な先生を口説いて、出席は取らない、学科によって差別しない、だっけ？それで、自主講座のなかで正規の授業に非常によく似たカリキュラムを組んじゃうんです。そんな闘争を彼らがやってるってのは、この資料をひっくり返すまでわかってなかった。

池上：それとね、栄養学科の女子大生の手記を読んだんですけど、栄養学科に入ったから栄養学科の勉強をしなきゃいけないから、バリケードになっちゃったからじゃあ先生を呼びましようとか、何月何日の何時間目のバリケードの中のカリキュラムは栄養学科の何とか先生とか、そういうことを三島はやってたみたいですね。もちろん他学部も一応…。

森：私はマル経の自主講座でやってましたけど、だんだん減っちゃって（笑）。初めのうちはワッと20人くらい来たりなんかしてましたけどね、だんだん減っちゃって、こっちも何となくたびれてきて、途中で「やめようか」とか言ってやめたとかね（笑）。

池上：一番不思議なのは三島で、もう一度ちょっと思い出した時に…。

大場：あとは、清宮さんたちの数学科事件の時に、「自治大学」というのをやってたんですよね。つまり、数学科の人たちが学外で、ほかの大学の数学の先生たちから正規の授業を受けるんです。もちろん単位なんか認定されませんよね。でも、それが数学科の学生の意気地になってるわけですね。それを「自治大学」と言っていて、それを多分バリケードのなかで数学科の諸君はやってたようなんです。というのは、倉田令二郎さんがお亡くなりになって、倉田先生のお弟子さんから問い合わせがあって、実は数学科の人たちのところに倉田先生が講義に行ってた、その時の記録はないかっていう、遺稿集を作るんだけどないかといって問い合わせがあって、初めて知ったんですよね。多分、数学科の清宮さんなんかもご存知だと思うんですけど、そのバリケードの中で闘争委員会とは別に自分たちのカリキュラムをやってたのは、なんとこれが丸山眞男先生のご子息の彰君なんです。彼、数学科なんです。だから彼には会いたいと思ってるんですけども、まだ…。

道場：NHKでちょっと証言してます。

大場：そうです。あの容貌もまるっきり当時のままです。ただあの時に、彼は確か「10・21で殴られて歯が抜けた」って言ってましたよね。あんな武闘派じゃないんです。実は本当に変わった人で、真冬でも半袖なんですよ。それで無精髭でね、自宅から確か自転車で通学しました。バリケードがあった時も、多分彼は通いの全共闘だったと思います。だからゲバルトなんか多分やってないんじゃないかなと思うんですけど。

池上：バリケードって30人か40人しかいなかったでしょ。

森：いやあ、もっといたよ。最初は300人くらい集まったと思うよ。もっといたかもしれない。

清宮：大場君から自主講座の話が出たので、先ほども申しあげましたけども、数学科の授業をやっている中心の人が全部クビになっちゃったんですよ。だから、そうすると授業ができないわけですよ。で、要するにどこかの非常勤の人や何かを呼んだりとかしてたんですけど、同じ建物で、同じ講座の名前を隣の教室で、要するに最初は学生、上級生が下級生を教える。で、それで対抗講座をやった。当然ながら教室はつぶされますよね。学内で授業ができなくなる。学内で授業ができなくなるので外で、労政会館とかそういうところに場所を借りて、そこで講義をやる。それをやってからさらに、今度はそれぞれの講師になっている、日大をクビになってよその大学に行ってる人がいますから、その大学で、今度は労政会館なんかを借りるんじゃなくて、それぞれの大学で講義をする。もちろん一切単位は取れません。それで、なんで支持したかという、要するに大学院へ行くための勉強をやったという、それでさっき数学者として残るという、そういうことだったんです。だから一番最初は隣の教室で同じ講義の名前で、しかも講師は学生なわけですから。それでやったんですね。そしたら当然右翼やなんかに妨害されますから、学内はだめで学外の場所を借りまくって、それでやってそれがまただめで、よその大学に行って、そういう感じでした。それが自主講座なので、当然バリケードの中の自主講座も数学の先生が行ってやってた。

矢作：東大全共闘との連携というのはあったと思うんですけど、それがどういうふうに進んでいったのかということと、東大闘争についてどういうふうに見ていたのかというのを聞きたいんですけど。

大場：正直言って…6月15日に僕ら文理で無期限バリストに入ったんですよ。翌日の新聞の1面だったと思うんですけど、〔東大の記事を見て〕率直に「おお、東大もなかなかやるじゃん」みたいな、そんな感じですね。だから、特別に仲良くしたいという感じはなかったんです。ちょっと掲げてるテーマが難しいんですよ、あの人たち。もう亡くなった中島誠さんという評論家が言ってましたけども、「東大全共闘は言うことはよくわかるが、行動はわからん。日大全共闘は言うてことはいい加減でわからんが、だけど行動はよくわかる」と。僕はこの寸評が一番当たってると思う。だから、東大の人たちはなんとなくずっと年上の人で…。

森：というか、山本さんはそもそもね、年上だから。

大場：もう大人ですもんね。大人の雰囲気なんですよ。だから、なんか〔東大全共闘は〕賢いお兄ちゃんだから、こっちは劣った愚弟だから、あまりお近づきにはなりたくない。

森：ほとんど意識なかったですね。

大場：意識なかった。だから、お互い本当に仲良くなったのは、バリケードが落とされて、僕らは駒場の人と明大和泉校舎の学生会館に居候し亡命政権になってから。一緒になって、そこで話すようになりましたね。それまでは多分、公式的にはないですよ。一応、11・22全国全共闘の安田講堂前での集会も、あそこも行つたやつと行かなかったやつもいるしね。

池上：あと、困ってるから助けに行っちゃった。

森：助けに行くってのはやったよな。

大場：そんなことはやってたけども。

池上：で、多分山本さんと話したことは、時々質問だけするんですけどね、秋田さんとは話したことはないんですよね。

大場：そうなんだよね、不思議だよね。

池上：全国選挙の時は本当は会議の時に会って、どうするかって話ぐらいあるかなーと思って。最初で最後の機会だった。機会だったら会わなかったんですかって聞いたら、会ったことがない、会ってはいるけど話をしたことがないと。

森：会ってはいるんだけど、山本さんとか秋田とか幹部が何人かで対談かなんかやってはいるんだよね。

池上：並んだのは並んだけど、ああいうのはあるけど、個人的にこういうふうに出て話してない。

森：山本さんはよくおしゃべりになるけど、秋田君は木訥^{ぼくとつ}な方だから、やっぱり読むとどうしたって「秋田、お前何しゃべってんだろな」みたいな感じになってますよね。しゃべる方はあんまり。

清宮：その東大との関係ですけど、関係はありました。何かというと、今井君が都学連の委員長だったんですよ。都学連の委員長だったので東京学生会館を通じて、日大だけではないですけど、闘争をやろうということがあったんですが、結局学内の闘争といわゆる政治闘争、今井君の最初のあれ〔大学管理法案闘争〕も学内の闘争ですから、外の政治闘争で協力するという形はできなかったんですよ。ただ、何をやってるかというのがあったので、それで大管法の問題が、日大の数学科事件がまったく62年の大管法の時に起きたのもわかって、今井君が処分されたというのもみんなわかってたわけね。それでその後だから、我々が数学の闘争ってことでいったように、山本君なんて物理のあれで、闘争行っていましたよね。そういう意味で交流はあったんですけど、一緒に何かをやるという、数学者とか物理学者とかそういうので何かやろうという話はあっても、大学の中の闘争でやるということは成り立たなかったんですよ。ですから、情報の交流はあったんですけど、それぞれの闘争が忙しくなっていましたので、あとは彼らが話したような形で繋がっていくんだけど。

森：どこから始まったんだっけなあ。68年10月だよな。

池上：そうですね、理工学部^{かくま}に匿ったぐらいかな。何人かはそこで触れるんですけど、山本さんと。山本さんと会って、多分僕は学生で、彼は先生みたいな感じなんです。今でも質問すると、いろんなアホな質問によく答えてくれます。「山本さん、いつから赤になったんですか？」って聞くと「そうだなあ…」って。きちっと丁寧に、親切には答えてくれる。

森：バリの構築にしょっぱな「手伝ってほしい」というか「指導してほしい」というのはあったと思うんだよ。

池上：行ってるんだよね、学部で。

森：多分その辺からじゃないかと思うんですよね。

大場：10月・11月くらい？

鈴木：バリケードの作り方ってことですか？

森：バリケードの作り方。

池上：11月から手伝いに行って、バリケードこうやってやって…。

森：あちこちから来たんですよ。京大からも来たし。

道場：「壊しにくいバリケード」って。

森：日大のバリケードの作り方をお教え願いたいっていう。

鈴木：日大のバリケードは評判だったんですか？

大場：評判良かったんですよ。

森：ほんと、全国あちこちから来ましたですよ。それぞれ行ってます、バリ作る指導に。

谷合：バリケードは技術を引き継ぐのがなかなか難しい(笑)〔バリケード作りの〕体験者ですみません、終わり方のところで質問なんですけど、「終わってない」とおっしゃった。私は1977年に京大に入りまして、ガラパゴスと言われて相変わらず赤ヘルかぶって運動していたほとんど唯一の大学だったんですけど、1979年1月19日に、東大が落城したその10年後、全国全共闘十周年集会というのを東大の安田講堂の前でやってるんですね。その時京都からはバスを仕立てて100人で乗り付けて、多分その時日大の学生とか東大、早稲田も、いくつかの大学が集まって、かなりの数の学生がその時集まってるんですね。それを思うとやっぱり「終わってないな」という。今日の話でピンと来まして。

池上：反原発でも^{のぼり}幟に「我らずと日大全共闘」っていうのと、「日大全共闘」って平気で。「いいのか」って言うのと「俺は全共闘だからいいんだ、許可はいらないんだ、俺が全共闘と言ったら…」。だから、4つぐらい幟を持ってジジイどもがウロウロしてます。だから、それが懐古主義ではない。ただずっと背負って生きてることは間違いない。

森：毎日テレビのニュースで「ある方」の顔を見ると、ついついムカムカとくるというね。「もう許さねえこの野郎」みたいなね。というのは、彼の背景にある同じ思想で我々はあれだけのゲバルトを受けたわけなんで、まったく同じ連中なんですよ。それが文理の1976、7年？ 反憲学連というのが青竜刀持って、日本刀持って、文理の全共闘がつぶされたんだな。その連中。

大場：ちょうど僕らの10年ぐらい後ですよ。78年ぐらいですか。

森：その連中が要するに反憲学連だから、その連中が今の…ご存じでしょう？ 日本会議の背景っていうのはね。梶島の、その日本会議の中に当時の連中がいるわけですよ。それが「ある方」の背景になっているわけで、だから思想的にはまったく一緒なんで、あれを見るとムカッとくるわけですよ。今でも終わってないと。

大場：だから、僕らの闘争の後の78年ぐらいに、何を恐れたのかよくわかりませんが、はっきり言うと「生長の家学生連合」というのがあって、そこが中心になって、すでにほかの大学に入ってるにもかかわらず、そこを中退させて日大の文理学部に再度入れ直すんですよ。その中で彼らはコアを作ろうとしてる。それが今言った反憲学連という。要するに憲法反対という意味なんですよ。

森：憲法を認めないってやつだな。

大場：それに対して、僕らと直接繋がりはないんですけど、僕らの系譜を引いた後輩たちがやっぱ

り現場でやり合ってるんです。だから、確か『平凡パンチ』が、歴博にお送りしたと思うんですけど、「10年目の日大全共闘」という特集をイラスト入りでやってるから、「ああ、まだやってたんだ」と。だからまあ、我々は旗を降ろすわけにいかないですもんね。多分80年代の半ばぐらいまで、そういう我々が本当に会ったことのない後輩たちが。もう完全にメディアも過激派批判一辺倒に行っちゃってるわけですよ、連赤とかあっちの方に。注目されない状況のなかで、シコシコやってるんですよ。シコシコなんて当時の流行語ですけどね（笑）。

道場：文理を中心に「日大銀ヘル」っていう部隊がいたと思うんですけど、今おっしゃってるのはその人たち…。

大場：そうです。結局、文理のヘルメットカラーが銀なんですよ。で、さっき言ったほかの学部から来てる1年生たちがずっと銀で育ってきてる。70年になってそれぞれ本来の学部に戻ってくる。その時に法学部の連中が、実を言うと法闘委の我々と同期の人は誰もいなかったらしいんです。それで自分たちがやらざるを得ない。そうすると法学部のメットカラーは白なんですけど、かぶり慣れた銀で、それで通しちゃえ。それで忽然と三崎町の法学部に現れて、それである意味で日大全共闘のスクールカラーは銀だというふうに誤解されたところはあるんですけど、あれは結局文闘委の1年生だった連中が70年に移って、三崎町で闘争をやるんですよ。彼らは71年、法学部3号館を一応学生会館として勝ち取っているんです。

池上：学生会館にして…要するに上の方の人もいなくて、党派もいなくなっちゃったんですよ。経済学部はずっと僕たちが残っていて、「僕たち」はおかしいけど、全共闘が代々30人くらいゴソゴソ残っていたんで。ライトブルー。ですからね、ここで学部ナショナリズムだと笑われるけど、「銀だよ」「俺はライトブルーだよ」って、今度は保守になっちゃうんですけどね。そういう色分けはありました。でも、多分70年の春からです。文理も銀に。文理ってものすごく多いんです、全共闘の部隊の数が。それで、三崎町の白山通りの上から見ると、銀ヘルが一番目立つんだよね。それで多分「日大は銀ヘル」。あの当時あんな銀色のやつは目立ちますよね。普通はあんまり「使わない」、党派の人たちが多いんでね。そういうことで多分「日大は銀ヘル」ということで。各学部、農獣医もみんな色を持ってるんですよ、ノンセクトの。

大場：農獣医は赤。

池上：黒も茶色もいるんだよ。それと、理工学部が逆モヒカンって、白で周りが赤とかね。

大場：違う違う、白でここが赤いんだよ。

池上：そうね。芸術学部が最初白だった。中核派だった。

大場：眞武君が捕まってるうちに、黒にした。

池上：「今だっ」というんで、芸術学部のすごい、「芸」と入った黒い精悍なヘルメットを作り上げた。

道場：写真集とか見ると、途中で色が変わってるなと思ったんです。

池上：見つけたのはさすがだと思います。最初は白なんですよ。芸術学部の人はアナーキーが好きなんだか、真っ黒に。学部によって色がどんどん…。

大場：学部でメットカラーが違うってのは多分、日大だけでしょうね。中央大学の人たちはみんな赤でCと、広島カープに似たロゴで、あれで全部統一されてますもんね。

池上：あとは党派の人たちが入って党派のヘルメットをかぶってた。

大場：多分あれは識別しにくいから、学部毎で纏める時に自然にそうなったですよ。

森：学部毎にみんな結束してくるので。

鈴木：ちょっと話がズレちゃうかもしれないんですけど、結局、闘争の目的というのは大学を民主化することだったと。それはどうなんですか？

森：民主化なんです。

鈴木：されなかったと？

大場：されてないですね。

森：実はですね、私も恩師がいるんですけど、去年の3月に対談したんですけど、現役の教授の先輩がいて、一通り終わってから80年代ぐらいってのは、我々の部の先輩が学部長になられたんです。

鈴木：牧野さんですか？牧野さんって理事になった人？そういう人が上がっていくってことはそれなりに…。

森：牧野さんの前後に我々の先輩が12,3人いるんです。繋がってましてね。それで、恩師も言っていたんですけど、「我々がやったことは意味がありました？」と聞きましたらば、そのおかげで牧野さんが学部長になったし、若手の教授たちもみんな協力したので、すごく民主化された、と言ってました。ただ、民主化されて、研究分野も本当に自由になったよと、なったけど、今の学生にはその意欲がない、とこう言っていましたね。

道場：僕、2001年から2008年度まで文理学部の非常勤で、「社会運動論」という授業をやっていました。

池上：じゃあやっぱり少しは良くなった。少しは学習してくれたんだ大学が。でも、それは大学が生きてく本当の…生きてくっておかしいですけどね、あのままだったらやっぱりおかしいですよ。

森：ただ、今「ある方」が理事長になってますから、政治の世界と一緒にね、まるっきり元にもどっているんじゃないかなという、非常に危惧してます。

黒川：ずっと関西で聞き取りをしていると、ベトナム反戦から全共闘に行って、またベトナム反戦に帰って行くという感じの、そういう同時代性があるんですけど、日大全共闘の場合においては、ほかの大学と違って圧倒的に、伺ってて本当に悪い大学、父が広大全共闘なので、日本大学がいかに悪い大学かというのをよく言っていたんですけども、そういう意味では同時代のベトナム戦争とかそういうものに関しては、どういう関心がおありでしたか？

森：来ましたねえ（笑）。

池上：同世代の一番最後の68年入学で、最初学校側だったんですけど、ベトナム戦争に関してはね、僕はまた特別な思いがありまして。新宿で夜毎日遊びに行くんですよ。マリファナも手に入るんですよ。それ全部米軍が持ってくるんですよ。友達が黒人になるんですよ、僕の場合は。横田の黒人たちと遊んでいるうちに、彼らがだんだん「戦争が」激化してくなかで、

事務方もどんどんいなくなってくんです。最後に、横田の夏休みにパーティーに呼ばれた時に、涙を流して話をするんで、その時に初めて「え、何なんだろうこの人たちは」と。それとアルバイトでね、横浜の山王ホテルっていうところでアルバイトをした時に、下級兵士の休暇場所のホテルだったんですよ。その時にやっぱり全部ベトナムに行ったGIたちが来て、帰る時に泣いて帰る姿をずっと見てて、そういう意味で僕は日大闘争もそうなんですけど、ベトナムの戦争に対してのわだかまりというか、何なんだろうって。

黒川：同時代のものとして受け止める…。

池上：受け止めるなかでね、兵隊で同じような歳、僕は18だから、20いくつぐらいで、日本語を軽くしゃべる兵隊がいたんですよ。ニューヨークの出身だそうです。で、ベトナムにかり出されてきたと。その話を聞くとね、反対しなきゃいけないかなっていう、だんだん思いが。そういう意味でのベトナムの繋がりと、ベ平連。ベ平連は、お笑いになるけど、4月28日の銀座で追われて、逃げ込んで匿ってくれたのがベ平連のあの大きな隊列なんです、ヘルメットをかぶってない。ヘルメットを捨てろと言われて、もう怪我もしてたんですけど、隊列の中に入れてくれて、機動隊や私服が追いかけてきたところを助けてもらった恩義があってね。変な話だけど、その辺からですかね、ベ平連という感覚は。やはりベ平連とは僕も、やんわりとした違和感があったんで、ベ平連自体に入ることも一緒に闘争することもなかったと。

黒川：ベトナムで戦争が起きていてという同時代的なことは、時代背景として理解されていたと。

池上：はい。右翼っぽいし、お笑いになるかもしれないけど、同和問題って大学に入るまで、絵本の童話の話だと思ってた。本当なんです。あと、部落問題も、市・町村・部落の部落を市に格上げするぐらいの話だと思ってた、情けない日大生だった。普通のゼミに行かない日大生はそんなもんですよ。そこから日大という大学に入って、「なんでこんなおかしい、平気でこういうことをするんだろう」。例えば同じ学生でも、「なんで学生同士こういうことをさせるんだろう」。僕は「させるんだろう」と思いました。勝手にやるのはかまわないですよ、右翼だから。そうじゃなくて、呼ばれて1年生2年生はわからないのに、そのうち「赤は悪い」と言われると「いけないんだな」くらいで。で、どうしてそういうことをさせるんだろうという疑問はずっと持っていました。ですから、その辺がマルクスと言われるとすごい困っちゃうし、今何やってるといったら、反原とかいろんな活動をしてるんですけどね、じゃあそれは何かと言われると根本的には、それがあったんだと思います。世の中の見方や考え方をそこで初めて教えてもらったんじゃないかな。

大場：統計はとったことないんですけども、闘争が始まる前に王子野戦病院なんかに関心を持って…。

森：かなり行ってますよ。

大場：一応ベ平連はいわゆる新左翼と違うんで、けっこうベ平連の活動に首を突っ込んでた人間は多いみたいですね。でも語られないから。何かで個人的に言うと、「ベ平連行っていました」みたいなことは。それで闘争が始まるとこっち側へ来ちゃいますからね、やっぱり多いんだろうと思います。あと、僕の知ってる社研の女の子で、多分民青だったんだけど、バッグ

にベトナム反戦のステッカーを貼ってる人はいました。さすがにそれは剥がせとは言われなかったみたいです。もちろん彼女は闘うつもりで貼ってるんですけどね、いちゃもんつけたらやってやろうという。多分それがわかったのか、要するに文理では黙認してました。

道場：何か当時の雑誌で見ましたけど、中村克己さんが世田谷ベ平連で…。

大場：多分そうだと思います。

黒川：ほかにも書いてありましたね、そういうの。反戦病院闘争があるのか…。

森：けっこう行っているはずですよあれ。

池上：多分、普通の一般学生の少し知識のあったのはベ平連の方に向いてたり、ただ日大闘争が始まったんで忙しくなって。

黒川：そういうことをやってただけど、もう日大闘争が始まるとまず大学民主化だということでそっちに…。

森：毎日毎晩、いろんなことが起こるわけですから。夜はガリ切らなきゃならんみたいなわけですね。毎日毎晩、本当に何だったんでしょうね、みたいな。あんなことやったもんだね、という。

荒川：そうすると、別な反戦運動経由、あるいはベ平連経由で日大の学園闘争のなかに入ってきた…。

森：ではないですね。ただ、古賀さんも意識の中には…というのは、当時まだ2年前の段階では、まったくそういう政治運動的なことは、政治運動でもないんですけどね、やってないんですね。非常に勉強してるというかなんというか、だけど、学内での「大学はおかしい」「学生自治が必要なんだ」「民主化をどうしてもやらなきゃいけないんだ」みたいなことを侃々諤々やっている。ただ、その意識の中にはベ平連であり、大学の学生会がつぶされれば、必ず次にこういう社会が来るみたいな、そういうことは…。今私、経済のことを書いてまして、ほとんど纏まりかけてるんですけど、経済学部の66年から68年の7月ぐらいまでとりあえず纏めたんですけど、当時の古賀委員長が言ってることとか、学生会の自治会に訴えたこととか、それはまったくおっしゃってる通りなんです。そういう時代背景をもとに学園の民主化を、あるいは学問の自由を求めなきゃいけないという意識になってるんですわ。だから、大きな社会的な背景としてはそうだと思います。ただ、行動はどうしても、体は学校の中でとにかく走り回ってるみたいな。

池上：私もその当時、夏に〔米兵と〕知り合って、ベトナムのことを考えるけど、結局大学の方が、やっぱり自分の身近だし、これはなんとかしなきゃ、という。これがなければ…過去にこれがなければということはないんですが、忙しかったんです。

黒川：米兵は新宿が多かったんですね？

池上：新宿は多かったですね。横浜にも、僕が3ヶ月間か4ヶ月間アルバイトしたところでは、横浜の磯子にある山王ホテルっていうんですけど、経営者が朝鮮人だったのかな。で、そこに、今だと言いたいけないんですけど、昔で言う朝鮮部落ってあったんですよ。そこに僕ずっとね、なぜかお世話になってたんですよ。その頃はあまり感じなかったんですけどね、今から考えるととんでもない貴重な経験をさせてもらったんだろうけど、その時は気づか

なかったんで、まあそんなもんかなぐらいで。そのぐらいですね。で、結局大学の方が気にかかって、行けば殴られるか殴るかのようなところだったんでね、捕まるとひどい目にあうとか。それは69年の終わりまでずっとそんなとこだったんで、多分…もうひとつここでお話するんですけど、会ったのは40年ぶりぐらいなんです。それまで僕封印しちゃったんですよ。はっきり決着がついてないもんですから、社会人としてどういうふうに生きていいかわからなくて、それがけっこう多いんですよ。何かのきっかけで、40周年頃先輩が死んで追悼会があるからってどこかから来て、行ってあれあれあれ。今でもね、いいよって言って会わないグループもあります。でも何をやってるかっていったら、それなりに町内で一生懸命がんばってるみたいなんですけど、日大闘争自体を自分から語ってくつのは少ないですね。僕なんかここが初めてくらいです。

森：私たちが30年から40年くらい会えなかった。仲間内でも会わなかったという感じですね。会っても…というのは、特に私なんかの場合は、自分の部の後輩が西条巡査を殺したという殺人罪というか致死罪ですけど、そういう裁判闘争で20年近くやっているわけで。どうにもできないじゃないですか。会ったって…というのは、私の方は68年の後半なんて、ほとんどもう、どう言えばいいか、無責任体制に、執行部にも何も入ってないもんですから、そんな思いもあって、後輩たちに本当にすまないなって。また、仲間内でもいろいろお互いにそういうのがあるわけですね。ずっと最後まで闘ってるわけじゃないですから。それを行ったのは秋田君ぐらいのもんでですね、だからお互いになかなか会いにくい要素があった。

池上：でも会ってみるとそんなことは思っていない。

森：会うと実は違ってましたね。ということなんですけど、例えば会う時に新宿西口の交番の前なんていうと、「そこへは行けないよ俺は」みたいな（笑）。

池上：やっぱりあそこの待ち合わせ場所が多いんだ。

森：そんなのがいて、「後から場所を教えるから」みたいなね。そういう連中がいるんで。人生狂わしてるわけですよ。自分の場合は運良くというか、途中入社であるそれなりの商社に入ったんで、非常に恵まれているんで、逆に言うとそういう後輩たちに対して本当にすまないという思いがあるんですね。闘争が終わってないと、自分でもそう思っていると、でも何もできないというね。だけど無責任に「一生懸命会社人生やりました」みたいな、非常に複雑な心境にあるわけで。だから簡単に会えないという状況が30年くらい実はあったんです。でも、やっぱり終わってないねというのは、池上君が言うのと一緒に、なんか最近テレビ見ると余計ムカムカくるんで、また火が付いちゃったみたいなことなんですけど。

池上：多分ずっと心の中で思ってるし、私みたいに途中はまったく離れて生きてくんですけど、みんな一つ一つ、なんていうのかな、全学連とはまた違う闘い方をしてしまったので、何がこうだからこうだよという、 $1+1=2$ で $2+2=4$ だから資本主義はいけないんだとか、そういう感覚はなかったんで、そういうふう就職しても今度は仲間に対してとか。僕が何十年後に会った時に、彼は名刺を渡すのを嫌がったんですよ。とてつもない所のきちっとした役員だったんですよ。でも、その日のデモに来られるということは、やっぱりその時何

かあったから来て、「何やってる、俺は浪々の身だから、捕まっても別に飯が留置所で喰うだけで、家で喰わなくなるだけだけど、お前は今捕まったらとてつもないリスクがあるだろ、通常言う社会的制裁になるだろう」って言ったら、「やっぱりじっとしてられないし」ってずっと思い続けてた。ということで、ちょうどいい機会だったと思います。多分これが10年早かったら、ここで語ることもなかった。

森：なかったでしょうね。

池上：いいよ、今更どうすんのとかね。それは逆に、老いて死ぬかと思ったからこういう話がベラベラできるようになったんでないかな。語り残したいというのは、やはり何か足跡を。それは秋田さんや山本さんとは違ったところでね、記録に残していただければという思いですか。

森：1年半ほど前に後輩が来ましてね、1年後輩の連中なんですけど、私を訪ねて来まして、何だろうと思ったら、5年前なんですけど、経済の前線で闘った連中ではあるんですけど、「この年になって気づいたけど、なんで俺たちあんなにムチャクチャやったんだろう」と。68年というのは彼らが経済に来てすぐなんですよ。だから先輩たちとのふれあいだってそんなにないし、そもそも学部状況だって自分たちわからない。わからないけどいつの間にかバリケードになっちゃった。いつの間にか闘いになっちゃったみたいなもんで、いきなりヘルメットかぶってるわけですね。それを今頃になって、「この年になっていろいろ考えたんだけど、なんでやったのかわからないので」…。

池上：トドメが20億ですよ。

森：20億じゃない問題でね。

池上：でも、あの時社会は理不尽なことが多かったですよ。ベトナム戦争のことにしろ、公害にしろ、いろんなことがあったと思います。

森：それは古賀執行部から藤原執行部のことになるんですけど、それを何か記録として書いてくれというわけですね。というのは、誰も書いてないんですね経済のことについては。それでようやくしょうがなく書き出したということなんですけど。古賀執行部の始まりはそもそも何だったのということは、学園の民主化から始まっているということですね、今改めて確認し直して、そこから6・11と使い込みの問題と、6・11に校舎を占拠されたというね、そこで爆発するわけなんですけど、そもそもは大学の学問を求める思いという、それと学園の民主化が絶対必要なんだという、それにはこの大学の経営理念おかしいじゃないかという、それがスタートなのだと私は言いたいんですね、経済としては。

荒川：森さんが今纏められてるものは、どういう形で発表しようとしてるんですか？

森：発表するかどうか、どうすればいいかわからないんですけど。

荒川：私的な覚書として。

池上：置いていきなさい（笑）。

森：彼らは、とりあえず半分読んだ段階では「わかった」と、「俺たちのやったことには意味があった」と言ってくれてますので、それをもうすこし精査しなきゃいけない。清宮先輩のところには置いてあります

清宮：最後のまとめというわけなんですけど、笑い話からすると、「清宮さん、どうして東大の人はみんな年寄りなんですか」って言うんですね。ほかの学生が「〔東大の学生は〕みんな浪人して入ったから」。大学院というのを知らないんですよ。そういう人たちがみんなやってきて、要するに日大はひどい大学、そのひどい大学を並の大学にするのか。それで、今民主化とか言ってますけど、並の大学にすれば皆さんの闘争は終わりなの？「違います」と言うからね、違うのであれば、じゃあ例えば山本さんみたいに「東大解体」で、あれはけしからんと言って、それでじっくり表現を重ねていってというふうに成り立てばいいけど、並の大学じゃなくて違う大学を作りたいのか、ほかのことをやりたいのか、定まってないんですよ、今彼らの話を聞いても。それで、例えばさっきからの数学の場合は、ベトナム問題の数学会議ってのをやっていますから、我々数学の関係では逃げられる道がひとつあった。ところが今彼らには逃げ道がないんですよ。森にも言ってるんですけど、「記録を作ってどうするの」、記録を作ったのをそれからどうするか、というのを考える時にきてるので、皆さんは日大全共闘は新しい全共闘党というパルタイを作ろうとしたのか、そうじゃないだろ。そうじゃないとすれば、今の政治闘争のなかで、うまく自分たちの感覚に合うのがないとすれば、今何をやろうとするのか。大学に対してOBとしてもう一度関わり合うのか、さもなければ違う何かで関わるのか。それを、記録を作っではっきりせいということを今言っているところなんで。何を言っているかわからなくなりましたが、正直に言うと期待したいんで。

森：この年になってもまだ煽る方がいるという（笑）。

荒川：まだまだ質問とか個人的に伺いたい人も多いと思いますが、ここで締めさせていただきます。2年後に展示をするわけなんですけど、皆さん方の出会いをさらに広げるような機会になれば、それはそれでやった方としてもうれしいかなと思います。あと、50箱になんなんとする資料、これ自体も重いのですが、皆さんの体験、思いの重さみたいなものをひしひしと感じ、かつ今日の話で資料の読み方について非常にいいアドバイスになりました。いい機会を作っていただいてありがとうございます。また、資料の整理については、私としては扱ったことがないような膨大な資料で、まだ何箱かという段階なのですが、これから資料を整理していく中でご相談に乗っていただくことが多いと思いますので、よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

森：私は昔丸井という苗字で、どこかに出てくるかもしれません。旧姓丸井です。

清宮：丸井が2人いまして、情報の丸井と、この四闘委の丸井と。

（以上）

（国立歴史民俗博物館「1968年」社会運動の資料と展示に関する総合的研究」共同研究委員会）

（2018年5月20日受付，2018年10月1日審査終了）